
深淵を引き裂く運命の剣

naka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深淵を引き裂く運命の剣

【著者名】

NZマーク

【作者名】

naka

【あらすじ】

退屈な毎日を送っていたルークは天空から落ちてきた剣を手にする。そのとき、彼は第7音素の光に導かれ、そこで栗色の髪の娘と赤い騎士に出会う。

TOAとFATEのクロスオーバーです。捏造設定、改変などが含まれています。

そのようなものが苦手な方は避けられたほうが無難です。
どちらかというと、かなりシリアスな方向に行くと思いますので、

「注意ください。また、ティアの設定が多大に変更されています。

タイトルとあらすじを変更しました。（以前のタイトル「TOA

×FATE（仮）」）

序章

月が出ていた。

月の光が深淵を覗くように深い闇を照らし、荒れた大地に咲く白い花々が、震えるよつよたの身を揺らしている。

すべてに背を向けるよつよたして、崖の向こうに広がる海を臨み、遠く聞こえる潮騒を観客に、女性の透明な歌声が響く。

いにしえの約束はひとつ始まりと終わりを彩り、新しい約束を生んだ。

その歌は始まりと終わりを結んで、また新しい始まりとなる。この始まりを知る者は無く、新しい悲劇の幕開けとなるだらつ。

やがて音も無く人影が姿を現し、彼女を伴つて闇の向こうへと姿を消した。

円は今田も夜の闇を見ている。

第一章 焰と闇と歌姫と

燐々と輝く月光も木々の陰影に切り刻まれて、足元を照らすのは小さなカンテラと、地面に深く刻まれた召喚陣の仄暗い光。虫の声も静まり絶え、かすかに吹き付ける風が木々の葉をざわめかせている。

そんな中で、一人の女性が長い髪をなびかせ、召喚陣の前で高々と詠唱を続けている。

乱れ飛ぶ音素を拾い、すり合わせ従わせる。
内に宿る異なる系譜の力を合わせ、混ぜて己に取り込む。
己の身体を一つの楽器として、魔力を糧に音楽を奏でるのだ。
「この世ならざる地へとつながる何重もの扉を抉じ開け、己を引き裂く重圧に耐えて、わずかにできた繋がりを辛うじて保つ。

「告げる。」

すでに外と内との境界はない。

召喚陣からは嵐が逆巻き雷光が輝く。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従つならば應えよ」

巻き上がる光に導かれるよつて、滔々と歌い上げる。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言靈を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

！」

そして、召喚の紋様が燐然と輝き、光の暴風が吹き荒れて世界は白く塗りつぶされた。

そして。

「問おう。君が私のマスターか。」

光と風の嵐が収まつたとき、一人の騎士がそこに姿をみせた。真つ白な髪と浅黒い肌、鋼のような鍛えられた身体に黒い鎧に赤い外套を羽織つて、射抜くかのような観察するような眼でこちらを見つめている。

魔力の残り香が漂うその薄暗い森の中で彼女は彼と相対した。怖気づく心を無理やりに押さえつけ、その鋼色の瞳を強く睨みつけ彼女は口を開いた。

「ええ、そうよ。私があなたのマスター」

そう言つて女は薄紅色の手袋を脱いで、その契約の徵たる令呪をかざした。

彼はそれを見て皮肉げに顔をゆがめると身をただし宣誓の言葉を続ける。

「サーヴァントアーチャー、召喚に従い参上した。

これより我が弓は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。

「ハハ、契約は・・・」

カラ

乾いた音と共に再び光の渦が巻き上がり、轟音と共に結界と魔方陣は粉々に打ち碎かれた。

サー・ヴァントはすばやく女を抱きかかえ、飛びのいてその先にいるものに向け剣をかざして警戒を強めた。

舞い上がる土ぼけの向ひへ、何かがいるのを確認して誰何の声を上げる。

「何者だ」

無音。

彼らはさらに警戒を深めて見てみると、土煙は晴ればろぼりになつた召喚陣の成れの果ての上に、長い髪の青年が倒れていた。

恐る恐る近づいて見れば、気絶したまま目を覚ます様子はない。それでもそのままにするわけにも行かず、どうしたものかと困惑

「へ?」

した様子で「の呼び出したサー・ヴァントを見た。

今日もまた代わり映えのしない一日であるはずだった。

キムラスカ王国・ファブレ公爵家の一人息子、ルーク・フォン・ファブレは第3位の王位繼承権を持ち、いすれば国王となることも十分にありえる身の上であった。しかし、7年前の10歳の頃に敵国マルクトに誘拐され、その精神的ストレスを理由にすべての記憶を失ったということで、それ以降は屋敷内に軟禁されて育つた。身の安全を図るためという理由であったが、ルークにとつてそんなことはどうでもよくて、速く外に出たいと田が覚めるたび眠るたびに思っていた。

外の世界がどれほど冷たく厳しいものであるのか、そんなことを想像することもなく、停滞した小さな世界の中でもどろむような日々を過ごしていた。

その時までは。

その日はとても天気がよくて、青空に譜石帶がきらきらときらめいていたのがよく見えていた。

ルークは屋敷からこつそりと抜け出して、裏庭に続く森の木の上に座つて屋敷を眺めていた。どれだけ眺めていたつて何が起きたもなく、だからといってあきらめきれず、もやもやした苛立ちをどうしようもできなくて、

「代わり映えしねえーな」

そう吐き捨てて、ため息をついたとき、下の方から聞きなれた声が聞こえた気がして振り向いた。

「やつぱつこか

そこには幼馴染でもある使用人のガイが苦笑を浮かべて見ていた。

「ルーク、おまえが勝手に部屋を抜け出したら騒ぎになるって言うたろ」

「なんでここが

驚いた顔でそう言つと「何年お前の世話をしていると思つてゐる」と笑つた。

「（）主人様の行きそうなところぐらいわかるさ。
使用者の鑑だろ？」

そうガイが茶化すようにウインクすると、ルークは枝から立ち上がり身を乗り出すようにして、

「おれはガイのことただの使用人だなんて思つてない！」

少し泣きそうな目でガイに向かって叫んだ。

この金髪と青い瞳の男はいつもそうだ。屋敷の人間に遠慮してそうやって線を引いて、そういう態度がどれだけいやな気分にさせるかわかつてくれない。

身分だとか血筋だとかそんなの俺は知らない。

幼馴染で親友。それでいいじゃないか。

ガイはすっと視線をはずすと、「そつだな」と口をゆがめて笑つた。

僅かに苦しげな表情を浮かべているのをルークは気にも留めない。せいぜい、口うるさい執事に文句を言われるかもしないことが、気にかかるだけだらうとそんな樂観的な感想しかなかつた。自分の意見が多少なりとも受け入れられたと思ったルークは少し機嫌をなおして、それでも機嫌の悪い顔をして偉そうにふんぞり返つた。

「それでなんのよつだ？」

改めてルークが尋ねると、ガイはそつといえбаといった顔をした。

「ガイ、ルークは見つかりまして？」

向こうの方から若い女性の声が聞こえてきて、ガイは振り返つて手を振つた。

ちよつと畏まつた態度をして笑顔を浮かべ、ルークの方を指差す。

「ええ、ナタリア姫。あそこに」

「あ、ば、ばか。教えるなよ」

ルークはわたわたしながらガイに抗議の声を上げる。

その女性、ナタリアはむつとした表情を浮かべ手を腰に当てていた。

いつものようにルークの礼儀知らずな態度にあきれつとも、だからこそこそしつかり言ってあげなくてはといふ使命感で朗々とした声を

上げた。

「ルーク、そんなところ何をなさつての」

その言葉にむつとしたルークは子供もっぽい表情で怒りだした。

「俺が何をしようとした俺の勝手だろ！」

「どうせこの屋敷から出られないんだ」

腕を組んでつーんと顔をそらして、17歳とは思えないような幼い態度でそんなことを言つ。

ガイはそれを見て、やれやれといった顔で苦笑した。

わがままには慣れているが、ホントにしかたない奴だな。仮にも婚約者なのだからもう少し優しくしてやつてもいいの。そんなことをガイは心の中でつぶやいた。

ナタリアにとつても、ルークのそんな態度は慣れたものだつたが、やはり気分のいいものではない。だが、彼の境遇を思えば哀れまずにはいられない。

昔の彼を思えば今の彼はまったく別人だが、いつかあの約束を思い出して昔のように戻張つていける。彼との約束のためにもつと頑張らなければと心に誓つのだつた。

ルークは跳ねるように木から飛び降りると、二人のすぐそばによつてきて相変わらず偉そうな態度をしてふんぞりかえつた。

「それより！ おまえこそ何しに来たんだよ

「ルーク、それが婚約者に対する『おい！ あれなんだ？？』

ナタリアの苦言を遮つて、ルークが驚きの声をあげ走り出した。
誰が想像できるだらうか。

空の彼方から、きらめく光が落ちてくるのをガイとナタリアは呆然として見つめるしかなかつた。

そのまま止まることなく地上に落ちて、三人が立つてゐる少し離れた場所に突き刺さり、それが一振りの剣であることを気づかされた。

「おい、ルークちょっとまで。危ないぞ」

はつとして、ガイが制止の声を上げるが止まるはずも無い。
刺激の少ない退屈な生活をしてゐるルークにとつては、危険であると止まる理由にならないのだ。

跳ねるようにすぐそばに走りより、周りを回つたり屈んでその剣の姿を観察してゐた。

「こつやこつたなんのことだ？」

「マルクトの新しい譜業か何かでしょつか。

ルーク、離れた方がよろしいのではなくて??」

一人のこわめる言葉も耳に入らず、ルークは剣に釘付けだつた。
その剣は今まで見た剣の中でもとびつきり変わつてゐた。

鍔が音叉のような形をしており、中心に金色の宝玉、刃はまるでひびが入つてゐるようなデザインがなされていた。

「すんげー」

ルークは目をきらめきらめさせて、今までに無いわくわくに胸を躍ら

せていた。

と、そんなルークにいつも彼を悩ませている激しい頭痛が生じた。それはいつも幻聴を伴つており、そのときもまた同じように聞こえてきた。

いつもなら、ただの厄介な頭痛というだけで少し休んでしまえば問題がないものであったが、そのときはタイミングが不味かつた。激しい頭痛に体勢を崩し、あわててその剣の柄をつかんで身体を支えたとき、激しい光と音が生じ、ルークを巻き込んで爆風と共に光は彼方に飛び去つていった。

暖かい。

優しく暖かな光が目の前を横切り、すっと消えてしまうと身体が楽になる感覚がした。木々のざわめきと共に誰かが話している声が聞こえ、いつたいどういうことだうとルークは思った。

目を開けると周りは薄暗く、木々の間から漏れる月の光がちらちらと輝いているのがわかった。

目の前では、髪の長い女性と騎士風の男性が深刻な顔で何かを話している。

「共鳴現象？」

「ええ、第七音素同士が干渉しあつて擬似超振動が発生したんだと思つわ。

この剣、おかしいくらい第七音素が詰まつてゐる。
なんでこんなことが・・・、あら田を覚ましたみたい」

女性ははつと氣づくとルークのそばに駆け寄つて、屈んで顔を近づけ心配げに青い瞳を細めた。

「だいじょぶ？ 痛いところないかしら。変なところがあるなら早めに言つてちょうだいね。一応、一通り確認したんだけど」

「あ、ああ。つて、あんた誰？ つーか、ガイとナタリアは？」

屋敷の連中は何やつてんだよ。

寝かしたままにしておくとか信じらんねー」

「えーっと。落ち着いて聞いてね。

「こには・・「マスター敵襲だ！」 嘘！ 大変！－！」

これ持つてと言つて剣をルークに押し付けたあと、女性は立ち上がりダガーを構えた。

がさつと草むらが揺れたと思つた瞬間、まがまがしい目をした魔物が飛び出してきた。女性はそれに向かい走り出す。

その間にも赤い騎士が魔物を次々と仕留めていく。

一本の剣を構えて踊るように剣を振るい、魔物は引き裂かれ血が吹き出て地に落ちていく。

「何で魔物が・・・」

状況がさっぱり理解できなくて、ルークは呆然として立ち尽くしていた。

あまりの状況の変化に対応できず、その後ろから魔物が隙をつかがつてることに気がつかなかつた。

辛うじて立ち上がり剣を握っているのが精一杯で、これからどう

すればいいのかと彼らの立ち回りをうかがうのがやつとだつた。

魔物達はそんな彼の心情など氣にも留めず、うなり声を上げて後ろから飛びかかってきた。

「後ろ！…」

その警告にあわてて振り向くと、牙を剥き出しにした魔物達が押し寄せてくる。

ルークは剣を握り直して、魔物を見てみつともなく剣を振るつた。うまく通らない剣に苛立ち、舌打ちをして後ろにいつたん下がり体勢を立て直すと女性が歌を歌いだした

魔物の動きが鈍つたのを見てチャンスと思つたルークは、魔物に飛び掛り渾身の力を込めて剣を振るつた。

感じたことの無い生々しい恐怖に怯えつつも、心を奮い立たせて襲いかかる魔物たちに立ち向かっていく。

一太刀一太刀に感じる死と言つ現象に、言いようの無い恐れを抱きながら。

そして1匹、2匹と押し寄せてくる魔物らを切り伏せ、これなら何とかなりそうだと思つたとき。

カシャン

軽い破壊音を立てて剣が碎け散つた。

「嘘だろー。」

あわててバックステップを踏んで、後方に下がつたとき女性が前に立つて魔物を打ち倒してこちらを振り向くと、あわてた表情で

「ひつひよー」といつてルークの手を引いて走り出した。

後ろから魔物が次々と襲いかかるうと、彼らに向かつて殺到していくのを赤い騎士が立ちふさがり切り伏せていく。

そして、森を抜け広く見通しのよい場所にたどり着いたとき、あまりの美しさに目を奪われた。

淡く輝く白い花が一面に咲き誇り、両脇に立つ崖の間に丸い月が顔を出して、その向こう側には驚くほど大きな水の鏡が月光に照らされてほのかに光っていた。

思わず言葉を失つて、まるで時が止まってしまったような気がした。

「アーチャー、やつて！」

「了解した」

振り向くと赤い騎士が目の前に立つて弓を構えていた。

何かをつぶやいたと思ったとき、強烈な爆風が吹き荒れて、押し寄せてきていた魔物達は消え去つていた。

その後にはなぎ倒された木々と抉れた岩と土が残されて、その威力のすさまじさを物語つていた。

「さて」

女性は啞然としているルークを見て、髪を搔き揚げて苦笑すると、

「私の名はティア。あなたの名前は？」

そう言って、また深く微笑んだ。

第一章 タタル渓谷にて

木々のざわめきが」とさらに夜の静けさを演出して、薄く輝く白い花の美しさをさらに際立たせているようだった。

そんな場所で彼女、ティアは地面に手をついてうなだれていた。

「ルーク・フォン・ファブレ・・・、貴族、しかもあのキムラスカの・・・」

その隣でルークは不機嫌そうな顔をしていた。

激しい戦闘が一段落して、名前を教えてくれって聞いてきたから名乗ったのになんだよこの態度は。なんか衝撃を受けたような顔をして倒れるようにしゃがみ込んだと思ったら、この通り、人を無視してなんかぶつぶつ言つてるし。

「ごたごたしたのが終わつて、やつと何がどうなつてゐるのか教えてもらえると思つたのに、これじゃあ振り出しじゃないか、役に立たない奴だなとそんなことを考えてた。

額にしわを寄せて見ていたが、ふと不安になつてきた。彼女も屋敷の人間みたいに変な態度をとるんだろうか？
身分とか言つやつか？ そんなの関係ないのに。

不安に任せてルークはティアに荒々しく声をかけた。

「おい、こつまでそんなことやつてるんだよ。
それよりこじどこだ？
ガイとナタリアは？
何でモンスターがいるんだ？」

なあ、『レーベン』なんだ？？

そんなルークの声を無視して、じばらぐぶつぶつ言っていたが、突然むくつと立ち上がった、

「ま、いいか。
釣り上げたら海老と一緒にマグロと鯛がついてきたようなものだわ。

何事も前向きに行かなきや、前向きに」

「ああ、『めんなさい』。『はタタル渓谷』よ。
あなた、超振動、擬似超振動だったかしら？でここまで飛ばされ
てきたみたいね。いきなり上から召喚陣に降つてきたからびっくり
しちやつたわ。しかも、結界もなにも崩壊させちやつし。

第七音譜術士同士でさえめったに起こらないつていうのに、いつ
たにびつこつとかしあ」

ティアは何事も無かつたかのよつて、ルークに解説を始めたが、知らない単語ばかりでよけいに混乱が増すばかりだった。

「はあ？ なんでタタル渓谷？？

それにちよーしんビー？ なんだそりや？」

「ああ、なんでかしら？？

それから、超振動つてこののは同一の音素振動数を持つ音素同士が干渉し合つことで起つてゐる、ありとあらゆる物質を分解し再構築す

る現象よ」

「だー、わけわかんねー。

俺を屋敷にかえせよーーー！」

「いきなりかえせって言われても・・・」「

ティアは困惑に言葉を詰まらせたが、その様さえもルークにとつては苛立ちの種にしかならない。
と、そんな二人を揶揄するように嫌みつたらしい言葉が振ってきた。

「やれやれ、何だと聞いておいてその有様か。この世界の貴族様は1から10まで説明してもうりつぱにろか、1の説明に100の説明が必要なようだな。

これならまだ幼い子どものまつがまだ可愛げがあつて付き合いやすい」「

「なんだとー？」

「それとも何かね？」

よしよし可哀想だねとでも言つてほしいのかね？」

「つ、てめー。何だよ、違うに決まつてるだろうがー。」

「はいはい、喧嘩はだめ。
アーチャーも挑発するよーなこと言わないでよ

ティアの諫めるよーな言葉に赤い騎士、アーチャーはフンッと鼻で笑つてそっぽを向いた。

その様子にルークはさりに腹を立てて、向かっていこうとしたがティアが呆れた顔をして割って入った。

「ほらほら、落ち着いて。ね？」

あんまり大きな声を出してたら魔物がまたよつて来るわよ

「つ、魔物？」

弓をつった顔であちこちを確認するルークに苦笑して、
「(s)は見通しがいいし、わざのこともあるからすぐこらへること
は無いわ」

安心をむぬよう(+)をついた。

「はあ、なんだよ。驚かせやがって」

そのため息を吐くルークにティアは思わずといった表情でくすく
すと笑つた。

それからすぐに真剣な表情をして青い瞳をまっすぐに向けて言つ
た。

「安心して、必ずあなたを無事に屋敷に送り届けてあげる」

そんな彼女の真剣な表情に(+)たえて、明後日のまつをむいて

「あ、あたりまえだな」

と、彼は弱々しげに咳いた。

遠くに見える海には月の光がそして、光の帯が波に揺れ滲んでいる。

「一面に咲く花はつましげに身を震わせて、絵画のよつなぞの光景に寂しげな色をつけている。」

想像もつかなかつたよつな美しい光景に、思わず目を奪われて、ルークは文句を言つのも忘れてそのまま遠くを見ていた。

ティアはそれを横田にやきつけと野営の準備を始めていた。

「今日はもう、ここで休みましょう。

もう、夜も遅いし森を抜けるのは危険だわ」

「ええー、こんな土の上で寝るのかよ。

毛布もベットもないの」「どうやって寝ればいいんだ? もー、信じらんねー」

苛立ちもあらわに吐き捨て「こんなところにられるかよー」と森に向かって叫ぶと歩き出した。

「ルーク」

今までに無い強い語調に思わず振り向くと、ティアはついつと手を振り下げて一言を唱えた。

「Gute Nacht
よやすみなさい

何だかうと思つ殿も無く、彼は強い眠りに引き込まれそのまま地面に倒れこんでしまった。

「はあ、つっかれたー」

ティアはせいせいしたといった表情で座り込んだ。

ルークの前では平気な顔をしていたが、実際には限界でどうしようもなく眩暈がして倒れそうだった。召喚に加えて突然の魔物の襲来で、体力も何もかも底をついてしまって、もうすでに気力だけで動いてるようなものだつたのだ。

それを傍観していたアーチャーは、やれやれといった呆れた表情を浮かべていた。いつの間に集めたのか、野営に必要な薪を抱えてきてテキパキと焚き火の準備を始めている。

「マスター、ずいぶんと安請け合いしたようだが本気か?」

「本気よ」

「そんな面倒なことをせずとも、アーチャー、これは決定事項よやれやれお優しいことで。これは先が思いやられるな」

「アーチャー」

「これは失礼、なにせ来て早々に戦闘で満足に話もできず、それが終わつたと思えばマスターはお子様の相手にかかりつきりで、何のために召喚されたのか心配になつてね」

ティアは綻ぶように微笑んで首をかしげた。

「あら、拗ねちゃつたのかしら?」

「いーや、別に」

「ふふっ」

「そんなことより、マスター」

アーチャーは「ホント咳をして、仕切りなおすように表情を引き締めた。

「さつきは余計な邪魔が入つて、大切なことを聞き忘れていたが、マスターの名前は？ 私はマスターをなんて呼べばいい？」

不意を突かれたように驚いた顔をしていたが、すっと顔を背けて黙り込んでしまった。

不審に思ったアーチャーが言葉をかけようとしたとき、強い意志を瞳に宿してはつきりとした語調で彼の問いに答えた。

「ティアよ。ティアって呼んで」

そう言つてふつと表情を緩めた。

「オーラルドラントにようこそ、異世界の英雄」

遠くから微かに鳥の鳴き声が聞こえる。

「ルーク、ルーク！ 起きて、起きてつたらー！」

ルークは小さくうなり声を上げて寝返りを打ち寝ぼけた声で

「うぬやこなあ。いいだろ別に、もう少し寝かせてくれー

「起きてつづば、ねえ」

「うー、うーせーーー。」

ガバッと起き上がり苛立たしげに叫んだ。

「何だよ。うるさーーーあ?

「うじだ?え?あれ?？」

日の光に田を眇めながら、ぼんやりあたりを見渡した。それをティアとアーチャーは呆れた様子で見ている。

「おはよフルーツ、もつ朝よ。

わざと起きて準備して、早く出発しないとまた森の中で野宿する羽田になるわよ

「あれ?森?

えつと、裏庭でだべつて、剣を見つけてそれで・・・

「まだ寝ぼけてるの?

「こはタル渓谷、忘れたの?

話してたら急に寝ちゃうんだから焦つたわ

つらつと私は何も知りませんといった顔で話すティアに、アーチャーは顔を背けてにやける顔を押さえていた。

「それよつほら、寝癖。

「飯ができるから食べましょ

その言葉にルークはしぶしぶ身を起こし、背伸びして大きなかくびをした。

いい天気だ。雲ひとつ無く、青い空が広がっている。

いつもならもう一眠りできるのにと思いつつ、促されるままにすでに調理された料理の前に座った。

シンプルなスープと軽くあぶつたパン、あと少量のピクルス。

今いるところを思えば十分なものであつたのだが、贅沢な食事で育つたルークにとつては衝撃だった。

田を点にして料理とティアの顔を見比べている。

「どうしたの？早く食べないとスープが冷めるわよ」

「これだけ？」

「わがまま言わないで、今はこれで精一杯なんだから。旅の途中で豪勢な料理なんてできるはずないじゃない？」

「はあ？ 信じらんねー。だつせーな

「はいはい、わかつたから早く食べてね」

めんべくさげに軽い感じで追い立てられて、ムッとしたがそれでも空腹を感じていたのでしかたなく食べることにした。

「あ、うまい」

スープを一口飲んでぼそつとつぶやく。

ルークは育ちのよさが滲み出る優雅な手つきで次々と料理を口の

中に放り込んでいった。

それを確認するとティアも料理に手を伸ばした。

しばし彼らは無言で食事に専念していた。

と、ルークがアーチャーの方を見て、眉をひそめた。

「なあ」

「ん? なんだね?」

皿をつぶつて立っていたアーチャーはルークのまつを流し見て首を傾げる。

「あんたは」「飯食べねーのか?」

「いや、私は「そういうえば、サーヴァントって食事必要なの?」、マスター」

アーチャーは眉をひそめてティアの方を見た。

「かまわないわ。どっちなの?」

じつとティアの方を見つめたが、根負けしたようにため息を吐いて軽く首を振った。

「食べられないことはないが基本的にサーヴァントに食事は不要だ。十分な魔力供給があれば空腹を感じることも無い」

「そう・・・なら食べる?」

「いや、結構だ。ただでさえ少ない食料を減らす必要はない。
私なんかのために振り分けるより、やほじの食べ盛りのナビもいた
くさん食べやせるといい」

「ナビもって俺の」とかよー

ちよつと腹が高いからつていこ『氣』になりやがつてー。

「まあまあ、いこじやない。小さくたつて」

「よくねーーー！」

「あ、おかわつこむ？」

「・・・こむ」

やつ言ひこむとティアに食器を差し出した。
なんとなく手玉に乗せられたような『氣』がして、ルークはそこはか
とない敗北感にがつくりとした。

それでも、料理はどうでも美味しかった。

第三章 道中にて

「「ううそつせまー。

ま、まあ、見た目の割にはまあまあ美味かつたよ」

相変わらずルークは偉そつてふんぞり返つてそう言つた。

それを聞いたアーチャーは嫌味つたらしい笑みを浮かべ

「それはそれは、こんな貧しい食事でも満足していただけたようだ
恐縮至極。

腕を振るつた甲斐があるつていつものだ

「はあ？ 何だよその言い方。ムカつくやつだな。
だいたいなんだよそれ、偉そつて」

「もう、喧嘩しないの。

・・・アーチャー「うそつせま。

こきなり自分が料理するつて言つからどうなるかと思つたけど、
すごくおいしかったわ。・・・まあ、ホントは私が作りたかったん
だけど」

「ティア、朝からあんなものを作りつてこいつのは間違つてると思
うぞ」

「いいじゃない、朝からたい焼きだつて

「いいや、朝はバランスの良い食事を取らないと身体に悪い。
甘いものだけの食事など認めん」

「えー」

「は？ ティアが作ったんじゃないの？ ていうか、たい焼きつてなんだ？」

「豆で作った甘いペーストをかりつとした生地で包んだお菓子よ。あんこはわざわざ手作りをしたんだから」

ティアは片付ける手を止めて、大きな胸をむんつと張つてそんなことを言った。

「ティア、食器は？」

「食後のお茶でもどうかね？」

アーチャーは何事もなかつたかのよつこ、ティアにお茶を勧めた。

「もううつわ。ルークも飲むでしょ？」

ティアもその言葉にうなずいて、ルークに尋ねた。ちらちら彼女の胸を見てたルークはあわあわして、皿を彷徨わせたあとに慌てて首を縦に振つてうなずいた。

「あ、ああ。飲む飲むー。」

「あれ、このコップつてどーから？ もうあの食器もやうだけど、どーしてしまこーんでもたの？」

そんなルークに気づくこともなく、彼女はつこせつときから抱いていた疑問を自分の従者に投げかけた。

「なに、かよつとした手品や」

そんなことを言つて、彼は口となく呰品やえ感じじる優雅な手つきで手早く、ついつつとお茶を注ぎ込む。

「ふーん」

和やかな空気が流れる。

「つだー、そもそも！」

お前誰だよ！

それに昨日のあれ！あれっていつたいなんだ！？

ルークはハッとしたようにグラブから顔を上げて、自分の疑問を穏やかな空間に叩きつけた。

「誰と聞かれてもな。さて、なんと答えれば満足なのかね？」

アーチャーは変わらないペースでヤレヤレと首をすくめ、鼻を括つたような言い方で返事をした。

ムツとして詰め寄りとしたルークを制して、代わりにティアが口を開いた。

「彼はアーチャー、『』の騎士のクラスのサー・ヴァントよ」

「あん？ そのサー・ヴァントってなんだ？」

「えつと、サー・ヴァー『』まで説明する必要はあるまい、日が暮れてしまつた。逐一説明していたらこつまでたつても出発できません」

むー。またそんな言い方して

「ぐー、むつかつやつだなー。」

「じゃあ、そろそろ出発しましょうか。

できれば日が暮れる前に森を抜けてしまいたいし」

ルークの怒り声を軽く聞き流して、ティアはそう言つと残りを片付けて、荷物の入ったバックを持つて森の中に入出した。

「あ、おい」

一瞬啞然としたあと、ルークもあわててその後ろをついて歩き出した。

ティアは入り組んだ山道を迷いなく、時々周りを警戒しつつ慎重に道を選んで進んでいった。ティアに続くルークの後ろにはアーチャーが続き、後方の警戒に当たっていた。

どれほど警戒してもやはり魔物の襲撃を逃れることはできず、その度にルークはみつともなく驚きながらも対応に当たることになった。

どうして自分がとルークは思わなくもないのだが、何故か必ずといつていいほどルークのほうに魔物が飛び掛ってきて、剣を振るわざるを得ない状況になつていて。その度にやれ脇が甘いだの、やれ良く見てタイミングを合わせろだと赤い騎士からの嫌みつたらしい助言が飛んできた。腹は立つのだが妙に的確な助言なので文句も言えず、ただただイライラが募るばかりだった。

「ついでー『双牙斬』」

飛び掛ってきた魔物を軽く避けて、力を込めて剣を振り下ろし、その勢いを借りて飛び上がり切り裂いた。

切り裂かれて血まみれになつた魔物の姿に思わず立ちすくんだとき、その隙を突くかのように横から別の魔物が飛び掛ってきた。

「っく」

引きつった顔をして剣を構えようとしたとき、後ろから剣が放たれてまっすぐに魔物の額に突き刺さつた。

「戦闘中に気を緩めるなといったはずだが

すぐ横を赤い影が通り過ぎ、魔物に突き刺さつた剣を抜き取ると一瞬のうちに残りの敵を切り捨てていく。

そして注意深く周りを見渡したあと、振り向きもせずにティアのすぐそばに歩いていった。

「ティア、怪我はないか」

「え、ええ。特に問題ないわ。ルークは？」

ティアは乱れた服を直しつつそう答えて、ルークのほうを見やつた。

「あ、ああ。こんなの俺様にかかればたいしたことないって

思わずといった風にルークはそう答えた。

実際のところは、慣れない実践でミスを連発していたが、それを

おぐびにも出でず見栄を張っていた。

彼女はそれに気がつかないふりをして微笑んで、ふと立ち止まつて見てルークのせばに駆け寄つた。

「セーラーと怪我してゐるじゃなー！」

ルークはその剣幕に驚いてのけぞつたが、それさえも氣にせずに彼のすぐそばに立ち止まると左腕をつかんで手をかざした。まそつと何かをつぶやくと仄かな光が傷口のあたりに広がり、見る見るうちに傷が消えていった。

それを田を大きくして見ていると、また、アーチャーが苦言を溢した。

「過保護なことだ。わざわざ魔術で癒すほどのことでも」「譜術よ何？」

だがしかしそれは・・「譜術」、了解した。譜術だな

言葉を遮つて、強く告げた言葉にしばし困惑した田をしていたが、納得したという風に頷いた。

「つだー。ふつちでもいいから早く離せー！」

その声にティアは掴んでいた腕を慌てて離して飛びのいた。そして、「ホンと咳をして何事もなかつたかのように繕つて、

「じゃ、じゃあ行きましょーか

とやつぱつと歩き出した。

それからしばらく歩いて、やつと森から抜け出した。ルークは大きく伸びをしてせいせいしたといった感じで

「やつと抜けたー」

と叫んだ。

「つたく、木はうぜーし邪魔だし土はぬかるんで滑るしもーやだ。早く帰つて屋敷のベットで2度寝したいぜ」

そう言つて、後ろを振り向くとアーチャーがティアも付き添つようにして彼女のそばに立つていた。支えようと手を差し伸べる彼に、彼女は嫌々するように身をよじつて拒んでいた。

「だから、まだ大丈夫だつてば」

「いや、しかしだな」

振り払つ手は弱々しく、ついにはバランスを崩し倒れそうになつた。

それを素早く支えて「だから言つたのだ」などといながら、そつと木陰の下に座らせた。

「悪いがマスターを見ていてくれないか。向こうで水を汲んでくる

「あ、ああ

剣幕に押され思わず頷いたルークを横田に素早く走り出した。

「お、おい、どうしたんだ？」

おずおずとルークはティアに尋ねた。

さつきまでぴんぴんしていたのにどうしたんだろうか。あんなに散々引っ張りまわしていたのに。屋敷まで送つてやるつて自信満々に言つていた癖に、こんな調子で大丈夫だらうか。

そんな考えが自分本位なものであるなど氣づくわけもなく、少々不機嫌なそれでいて不安げな表情を浮かべている。

「ん。だいじょーぶ。あ、ありがとー」

いつの間に戻ってきたのやら、アーチャーが濡れた手ぬぐいをティアに差し出している。

「少し休んだほうがいい、顔色が悪いぞ」

ティアは上の空で手ぬぐいで顔を拭くと、丁寧にたたんでアーチャーに返して手袋をしっかりとつけ直して弱々しげに笑った。

「心配性だなあ。このくらい大丈夫よ。

ちょっと、むじうの川で顔洗つてくるわ。よつと」

身体を重たげに起こすと、ティアは川のほうに歩き出した。アーチャーが何か言いたげにしているが、見ないふりをして川のほうへといつてしまつた。

ルークは行つてしまつたティアと不機嫌なアーチャーを交互に見比べていたが、どうでも良くなつてため息と共に座り込んだ。

「あー、だつせーなあ。なんだよー体」

「ふん、大方世間知らずで我専なお坊ちゃんの相手をしていて消耗したのだろ。わがマスターながら心優しいことだ」

「なんだとー？」

突つかかっていいルークを見やつて、アーチャーは嫌みつたらしい語調で答えて、またティアの方に目を向けた。ほんの少し目を陥しくして黙り込む。

「なんだよ」

「いーや、なんでも」

そう言いつつも、ティアのほうへ向ける目をそらしきはしなかつた。

「い」めんなさい。待たせたかしら

「ティア、やはり今日はもう休んだほうがいい

「え、ええ？ まだ日が高いわよ？」

アーチャーの言葉に少しの焦りを滲ませて答えたが、やはり過労の色は隠せていなかった。

「今日はここで野喰にして、いいな

「えー」

「やつた、つつかれたー」

ティアは不満げな顔をしたが、ルークの「機嫌な声を聞いて諦めたの、かしふしふまた座り込んだ。栗色の髪を手袋をした手で戯れに漉いてぶつぶつ言つてゐる。

「もう、大丈夫だつて言つてゐるのに」

「「まかしても無駄だ。もう、魔力がほとんど残つていないぞ。サーヴァントの呼び出しで魔力をだいぶ持つていかれたというのに、こんな無茶をするなど無謀にもほどがある」

ティアはクドクドと説教をするアーチャを恨めしげに見ていたが、彼は歯牙にもかけず言葉を続けた。

「まつたく、それなのに残りの魔力で限界の身体を動かすなど自殺行為だぞ。

こんなことでマスターを失うなど、笑い話にもならない」

「・・・じめんなさい」

しょんぼりとした顔をみて表情を緩め

「まあいい。過ぎたことはしかたあるまい」

そう言つて、ティアの頭を軽くぽんぽんと叩く。

ティアは少し不思議そうな顔をしたが、やわらかい笑顔を浮かべて頷いた。

それをルークは何故か機嫌を損ねた顔で見ていた。

「あーもう一ょくわかんねーけど、これからは氣をつけるんだぞ!」

俺さまたが師匠に習つた剣でしつかり守つてやるんだから、お前は責任持つて俺を屋敷まで連れてけ！自分の言つたことは責任取れよ！」

「ほほ」

ルークの言葉にアーチャーはにやりと笑つた。

「その言葉、間違えないな」

「お、お！」

妙な迫力にうろたえながらそう答えると、アーチャーは朗らかな表情で続けた。

「ならば、暫く私は靈体化していよう。なに、あれだけ実践を積めば何とかなるだろ。魔力の消費を抑えればそれだけマスターの負担も減るしな」

そう言つと、一瞬の内に姿が見えなくなつた。

泡を食つておひおひするルークにビックからともなく笑い声が聞こえる。

「き、消えた！消えりやつたぞ、おい！」

ティアは指を刺して動搖した顔でこちらを見るルークに苦笑して、

「そりやそりや。もともと魔力で無理やり実体化させてたんだもの。魔力をカットしたら靈体化するのは当然だわ」

「当然で、おい」

「大丈夫よ、すぐそばに控えてるし何かあつたらすぐに対処してくれるわ。そりやしょ？」

『 もちろんだ。マスターの盾となり剣となるのがサーヴァントの仕事だ』

苦笑にも似た声音で、どこからともなく声が降ってきた。

「「うおー、びつくりしたー！なんだよ、きなりー！」

「・・・・、びつくりした？

・・え？ もしかして今の聞こえた？？」

ルークはおろおろとあちこちうろついてる。

「・・・・、アーチャー」

『 了解した。お坊ちゃんこの声が聞こえるかね？』

「つだーーーだから坊ちゃんて言つんじゃねーーー、隠れてないで出て来いー！」

「えー？」

ティアは田を丸くして呆然と立ちすくんでいる。

『 ルーク聞こえる？？』

「だーうぜー。何だよさつきから」

拳を振り回してガーガー唸るルークを見やつて、ティアは頭を抱えていた。

通常、何もせずにラインが繋がるなど有りえない。しかも、マスターとサーヴァントと同時に繋がるなんて。

RJ喰陣に飛び込んできたことが原因だらうか？ だが、そんな事例など記録には残つていない。

うーんーうーんと唸つてゐるティアにルークはふと不安げな顔を浮かべて

「大丈夫か？ また具合悪くなつたのか？」

と恐る恐る聞いてきた。

ティアはその言葉に「大丈夫、何の問題もないわ」などと、笑つて答えた。

なおも不安げにしているルークに「今日は私が腕を振るつわ、楽しみにしていてね」、などと言いつつも、これからどうするべきか深く悩むのだった。

ティアが鍋を搔き混ぜながら歌を歌つてる。

長い栗色の髪を二つに束ねて、顎を心なしかキラキラさせて、

一モニーを奏でている。

手持ち無沙汰なままで
リーグはなんどなくテノアを見ていた

ティアは変なやつだと思う。こんな辺鄙な森の中で変な男と突つ立つてゐるし、変なサー・ヴァントとか言う奴を引き連れてるし、俺の言つことを適当に聞き流すしかと思つたら、時々優しいし。
少なくとも悪い奴じゃないのかなあ。俺を屋敷まで連れてつてくれるつていうし。

あー、でもせつかく外に出たんだからいろいろ見て回りたいな。
でもなあ、つるせー小姑みたいな奴がついてくるからなあ。

そこまで考えて、ちらつと周りを見渡した。

アーチャーは相変わらず姿が見えない。

ついさっきまで、やれ少しごらいは手伝えとか皿を持つて行けなどと煩かつたが、ティアに窘められて今はとても静かだ。

例えるなら執事のラムダスみたなものだらうか？　でも、そうだ
らう二は河川違うござる。二三一儀ござ見つからば、らうが

いや関係ないや、気分悪りー。

できたよーとこう明るい声に呼ばれて、ルークは思考をカットして料理をせつせと並べているティアのそばに歩いていった。

夕焼けも姿を消して、無数の星が夜空を飾っている。

微かな草々のざわめきと虫の歌声が耳に優しく、子守唄を聞いているようだ。

ティアは金色の櫛で髪を梳かしながら、眠るルークを見ていた。炎の陰影が揺れて赤い髪がさらに燃え立つよつきらめいて見える。

一体、彼は何なんだろう。何故、召喚陣の上に落ちてきたの？あの剣は何で碎けたの？何でラインがつながってしまったの？

疑問ばかりが頭に浮かんでは消える。

それでも、ラインを切つてしまわないのは、無理に手を加えようとして彼を傷つけることになるのを恐れたからだ。

でも、私情なんてそんなもの・・・。

櫛を梳ぐ手を止めため息を吐く。

そもそも、何でわざわざ送つてあげようなんて思つたんだろう。何かあつたときのためにと、わざわざサークルの存在さえ明かして。

いくら考えても答えは見つからない。

それでも、かかわることをやめるなど絶対にしたくない、と思つているのも「まかせない事実だった。

ため息を吐く。

「ため息ばかり吐いてると、幸福が逃げていくぞ」

いつからいたのか、すぐそばでアーチャーが呆れた顔をしてティアを見ていた。

「さつきからずつとその坊やの顔を見ていたが、始末をつける算段でもついたかね？それとも惚れた？」

「ば、馬鹿！ほ、ほれた？？な、なななんなんのそれ！そ、そんなことあるはずないでしょ！ば、馬鹿なこと言ってないで、おとなしく靈体化してなさい！

「...」
そんなことわざわざ実体化して言わないで、
ライン越しで十分よ

「そんなことをいうがな、先ほどからずっとライン越しで声をかけていたのだが」

ヤレヤレといった顔で肩をすくめ、苦笑交じりにそんなことをいつてきた。

「え？ ああ？ そ、うだつけ？」

「まあ、私としても恋の戸惑いにやれる見田麗しこの女の姿をじつ
くつと見られて得をしたがな」

「な、なななあー！」

「ふつ、冗談はともかく、そろそろ寝たほうがいい。休めるときに休んでおかないと、身体が持たないぞ」

「わ、わかつたわ」

ティアは動搖した顔を隠して、手に持つた櫛を小さな小箱に片付けて懐にしまいこみ、しずしずと毛布に潜り込んだ。相当疲れたのか、すぐさま小さな寝息が聞こえてくる。

焚き火の跳ねるような小さな音が静かな夜の空間に響いている。アーチャーは無言で周りを見渡すと、ため息を吐いて靈体化した。

空を見やれば、譜石に付き従つように星が輝いている。千里眼のスキル持ちであるアーチャーでも、さすがに譜石に浮かぶ文字を読むことはできない。

もちろん、読めたからといって意味のあるものではないのだが。

『スコア
預言か・・・』

おかしな世界だ、何もかもが預言通りに進むなどと。

戦争も平和もすべて預言通りに進む世界。まるで機械仕掛けの箱庭のようだ。

決められたタイミングで決められた動作をこなせば、何もかもすべてが正常に動く世界。なんて寒々しいんだろう。

まあ、世界の奴隸として殺戮を撒き散らすことしか能のない私に、そんなことを言う資格などないだろうが。

ユリア・ジュネは何を思つてスコアを残したのだろうか。いや、そもそもスコアとは何だ？ 何もかもがすでに定められている？ それはまるで根源の渦のようではないか。では、第7音素は根源に何か関係があるので？

・・・いや、考えすぎか。どちらにしても判断材料が足りない。

炎の跳ねる音と寝息が聞こえる。

ティアは小さく寝返りを打つて何かを引き止めるように手を伸ばす

し、パタッと降ろした。うにゅむにゅと何か寝言を言つているようだ。

アーチャーは姿を現すとティアに毛布をしつかりとかけなおした後、優しく髪をなでた。

召喚されてその夜に、この世界には魔術は存在しないとハッキリと彼女は言い放つた。この世界で主流なのは譜術といつ音素を用いた術だと。

しかし、彼女の使つている術はどう見ても自分が慣れ親しんでいる魔術だ。

その存在しないはずの魔術を使つてこの少女は一体何を背負つているのだろうか？

異世界の英雄は夜の帳が空けるまでの間、答えの出ない問いに身を沈めていた。

「ルークー！－ねえ見て！蝶々！」

「だあー！－見りやわかるだろ！－うつせーな

旅路は小さな衝突を繰り返しつつも順調に進んだ。

なんだかんだ言いながらも、走り出すティアを追いかけていくルークに、アーチャーは靈体化したままの姿で思わず笑みを浮かべた。心配した魔物との戦闘も危なげなくこなせるようになり、余計な魔力の消費も抑えられてティアが体調を崩すこともなかった。

戦力増強のために、森の中でわざとルークに魔物をぶつけた甲斐があるというものである。

「ティア！」

遥か遠方に立ち上がる煙と光を見て、アーチャーは前方を走るマスターに声をかけた。

「わかつてる」

ティアはまっすぐ音が聞こえた方向、すでに通り過ぎたローテルローブ橋の方を見つめて、何が起こったのかと険しい表情で探つていた。

「あれは・・・マルクト軍?? 陸上装甲艦が何を追つてゐるのかしら」

首を傾げて考え込んだ。

「はあ? マルクト軍?? つーか、見えるのかよ」

ローテルローブ橋はすでに遥か彼方で、ルークの目ではとても確認できない。

どれだけ目がいいのだろうと変なものの見るような目で一人を見た。

「え? あ、ええ、見えるわよ? ルークも見たい? ?」

「見れるのか! 見たい!」

ルークは瞳を輝かせてティアの方に詰め寄つた。

「いいわよ。アーチャーちょっと視界を借りるわよ

「何もそこまでしてやらずとも・・・」

アーチャーが困惑したような顔で一人を見ていたが、ティアはそれにかまつことなく、ルークの肩を掴んだ。

「ちょっと」めんね

そういうてティアはルークの額にこつんと自分のおでこをくつつけた。

ルークは驚いて、身体をよじつて飛び退き、指差した腕をぶんぶん振つてティアに向かつて叫ぶ。

「な、何しやがんだおまえはーー！」

「ちょっとー、それじゃあ術をかけられないでしょ。見たいんじやないの？」

ティアは口を尖らせて不満そうな顔でルークを見た。

「くつつかないと見せられないんだから、ほらーー！」

そう言って、強引に引き寄せると額をくつつけて小さな声で何かを唱えた。

すると、いきなり視界が変わつて威風堂々とした大型の乗り物が土煙を立てて猛スピードで走つていくのが見えた。

陸上装甲艦は暫く砲弾を打ち合つていたが、突然その場に停止した。

すると突然前方に光と炎が立ち上がり爆風を放つて、もうもうとした黒煙と共に石でできた橋が崩壊していった。

と、いうところであつと視界が元に戻つた。

ルークが田を丸くして顔を上げると、ティアの綺麗な顔がすぐそばにあるのに驚いて慌てて飛びのいた。

「な、なんだよあれ！」

「だから、マルクト軍の陸上装甲艦だつてば」

「そりじゃなくつて、なんでそんのが見えるんだよ！」

「ああ、ルークの視界に私のライン経由でアーチャーの視界を移したの。よく見えたでしょ？」

「はあ？ なんだそれ」

「もう、そういう術なのよ。その程度の認識でいいわ。じつせ細かい説明してもきかないだろ？」

「はあ・・・」

その言葉に反発しないでもなかつたが、どうせ説明されても小難しい単語を並べられるだけだろうと気にしないことにした。

「アーチャーの視界ねえ。・・・気持ちわりー」

「それはまじめの台詞だ」

アーチャーが苦虫をかみ殺したような顔ですべて立っていた。

「つおわー・びつくつしたー！」

ルークの言葉を無視してティアを見て言葉を続ける。

「術をつかつたようだが身体は大丈夫か?」

「心配性ね、大丈夫よ」

いたずらっぽく微笑んでティアは己の従者に答えた。

「それに魔力はルークから拝借したし」

アーチャーはルークを見た後、納得したように「なるほど、それなら問題はない」とうなずいたのだった。

「は? 何の話だよーおこりー」

「それにしても困ったわ」

文句を言つているルークを無視してティアは言葉を続けた。

「こんなところでマルクト軍にぶつかるなんて。面倒なことにならなければいいんだけれど。

ケセドニアにまっすぐ行く道は難所だから、遠回りでエンゲーブに向かつていいけどもしかしたら失敗したかもしれないわね」

「ふむ、そこまでキムラスカとマルクトとの関係は緊迫化しているのか?」

「そうね。今は辛うじて均衡を保つていいけど、辺境では小規模な戦闘が起こつたりしているらしいわ。すぐに戦争つてことになることはないでしようけど・・・」

「うだー！いいからとっとと行へやー！

いいかげん野宿は飽きた。早く町にいって宿屋のベットで寝るぞ

！—」

そんなルークの言葉に一人は顔を見合せ苦笑するのだった。

第四章 答への出ない問い（後書き）

ケセドニアへの道はルークたちの装備では突破するのが難しいということにさせていただきました。

この小説での独自設定です。ご了承ください。

2Gシーン 第一章～第四章（前書き）

本編に関係の無いコネタです。特に読まなくても問題はありません。
息抜きにどうぞ。

第1章

テイク1

「問おう。君が私のマスターか。」

そこにはよくわからない大きな体格の生き物が立っていた。緑色でぼっっちゃりとした身体、大きな目をしてこちらを見ていた。

「セーヴァンと、らいだー。召喚に従い参上しましたー。真名はガチャピンだよ、よろしくね」

「チエンジ」

テイク2

「問おう。君が私のマスターか。」

そこには赤いモジヤモジヤ髪の白い肌に赤く大きな唇が特徴の明るい空気の人が立っていた。

「サーヴァント・ランサー、召喚に従い参上したよ。世界中の子どもたちに愛を振りまく優しいピエロ、ドナルド・マクドナルドだよ。

よろしくね、らんらんるーー！」

一九四五年一月

一九五二年五月

ティアとランサーは踊りだした！！

第2章

「はいはい、わかつたから早く食べてね」

めんべくさげに軽い感じで追い立てられて、ムツとしたがそれでも空腹を感じていたのでしかたなく食べることにした。

「む、むむむ！！」

俺が海原
山の孫弟子だとしつての狼藉があーーー！」

アーチャーが爽やかな笑顔で

「殺してしまつても構わないかね？」

とティアに聞いていた。

第3章 道中にて

「誰と聞かれてもな。さて、なんと答えれば満足なのかね？」

アーチャーは変わらないペースでヤレヤレと首をすくめ、鼻を括つたような言い方で返事をした。

ムツとして詰め寄るうとしたルークを制して、代わりにティアが口を開いた。

「ウルトラの国からやってきた光の戦士、正義の味方のウルトラヒーローよ」

「え？」

「「」の星を悪の宇宙人から救うために、わざわざ数億光年の彼方からやってきたの」

「おおー」

「そりゃ、その名はウルトラマンシロウー！」

「残念！ 3分立つたので帰ってしまった！！」

第四章

ティアは金色の櫛で髪を梳かしながら、眠るルークを見ていた。炎の陰影が揺れて赤い髪がさらに燃え立つよつからめいて見える。

ティアはおもむろにマジックペンを取り出すとルークの額に「肉」と書き鼻の下にガイゼル髪を書き込んで満足げにうなずいた。

「ティア・・・何をしている」

「やつぱつ」れつて定番だと思ひの。アーチャーも何か書く?」

アーチャーはペンを手に取ると、頬にぐるぐると丸を書いて鼻の先端を黒く塗りつぶしたのだった。

2Gシーン 第一章～第四章（後書き）

「めんなれこ」「めんなれこ」「めんなれこ」。

第五章 無知とリンク

窓の向こうに白い森が続いている。

何もかもが雪に埋まって、わずかに見える木々さえも白く染めてしまおうといふかのように、粉のよだな雪がさんさんと降っていた。ぽーっとそんな風景を見ていた。

呼びかける声が聞こえて振り向くと……。

「ルーク、ルークつばーおーきーてーー！」

「うーん。ティア、もつと寝かせろよー」

弾むよだな声こぼれて、夢の白い幻影は消えてしまった。

「早く起きないと、毛布剥ぐよー。

10秒前、9・・省略ーはい、終了ーー」

フロントを突いて、おもむろに毛布を引っ張った。ルークがしつかり毛布に抱きついてたせいで、ルークも一緒に引きずられていく。

「いてててーーー！」

「ティア、毛布が痛む」

アーチャーのどこかのんびりした言葉に、ティアはハツとして立ち止まつた。

少し困った顔で毛布とアーチャーの顔を見比べた後、「毛布さん

「めんなさい」と申し訳なさそうな声で謝った。

ルークはガバッと立ち上がると、顔を真っ赤にして「毛布に謝まつてないで俺に謝れ！…」と叫んだが、全然反省する様子も無い。

「やれやれ朝から元気なことだ」

軽く首を振つて呆れた顔で一人を見た後、濡れた手ぬぐいをルークに投げ渡し手元のこまごましたものを片付けながら言い放つた。

「早く準備しろ、このペースなら昼にはエンゲーブにつけるだろ。まあ、箱入り息子のお坊ちゃんが道の真ん中でダダをこね始めれば無理だろ。がな」

「やんねーよ！」

「ふ、だといいんだがな」

「ぐーむかつく！」

ルークは拳を震わせて睨みつけ、アーチャーはビンが楽しそうなティアに声をかけた。

「ティアもだ。坊主で遊んでないで、早く準備をしろ」

「ううるさい」言葉に追い立てられて、二人はいつものように食事を始めた。

ルークは質素な食事にかなり不満そうな顔をしているが、文句をいつと途端にアーチャーがすごい勢いで小言を言い始めるので黙っている。

「好き嫌いをしていると大きくなれんぞ」

黙つてもやはり小言は付き物のようである。

ルークは小魚のフライを一齧りして、すこし嫌な顔をして皿の脇によける。

そしてその横のイモのサラダに手をつけようとしたりで、ティアが声をかけた。

「ルーク、フライいらぬの?」

「ああ、魚嫌いだ」

「えー、美味しいの?」

そう言いつつ、おもむろにルークのほうに手を伸ばすと食べかけのフライを摘んで口に入れた。

「うん。おいしい」

「あー、人の口つけたものを吃べるのはよくないんだぞー」

「え、 そななの?どうして?」

「・・あれ? なんでだろ?」

残念ながら、ルークは間接キスなどという概念を知らなかつた。そして、ティアの方もそれは範疇外だつた。

アーチャーはそんな残念な会話を無言で聞かなかつたことにしてもつぱら給仕に専念していたのだつた。

「あ、そうだ。ルークにお願いしたいことがあるんだが」

「あん？」

ハンゲーブに続く道を歩いていると、ティアはおずおずとこいつた調子でルークに声をかけた。

ルークはおやつこと渡された、小さなたい焼きを口に入れつつ振り向いた。

「アーチャーのこと黙つてほしきの」

「はあ？ なんで」

ティアは自分の口をハンカチで拭つて、ポケットにしまつてさしつた顔で言葉を続けた。

「えつと、ここから先は敵国の勢力圏内だから、念のために奥の手は隠しておきたいの」

「いじじやんべつに」

あつさつと言い放つルークに、ティアは眉をひそめ固まつた後、ちよつと考え込んですぐにはいかが意地の悪い笑顔を浮かべた。

「それにサーヴァントのこと誰かに知られると大変なことになるの。例えばね・・ちよつと耳貸して」

ティアは顔をそつとルークの耳のそばに寄せて小さな声で話し始

めた。

「サーヴァントをばらしたらね・・・」によ「」によ「」によ・・・。それでその人は・・・「」によ「」によ。で、そしたらね・・・・・・・なの」

最初はめんどくさげな顔をして聞いていたが、だんだんと顔を青ざめさせて立ち止まり、ギギギと首を動かしてティアの方を振り向いた。

「おじで？」

「うん」

「わ、わかつたよ！べ、別に怖いわけじゃないけど、ティアがそんなに言うなら黙つててやるよーー！」

手をふんふんと振り回して言った後、川一ヶは勢いよく歩きだし

そんなルーケの後姿を見ていたティアにアーチャーが不審げに声をかけてきた。

『ティア、いいのか?』

「はれなきせいいの、はれなきせ。念押しに軽い暗示もかけておいたから問題ないはずよ」

『なるほど』

「おー、早く行くぞー！」

「わかつてゐつてば」

ティアは荷物を持ち直して、ルークの後ろを追いかけだしたのだった。

風車が青空を巻き込んで大きな羽をぐるぐると回している。

草原に姿を現したエンゲーブは穏やかで、さまざまな作物が植えられている。

ある場所では華美さは無くとも暖かみのある花々が咲いて、またある場所では実を鈴なりにつけて重みで体を揺らしている。

ティアはルークと露天に向かう道をゆつたりと歩いていたが、ブウサギの柵の前でぴたつと足を止め、ブウサギを見つめたまま無言。そのまま身動きもしない。

「ティア、ティア！！行くぞ！」

「え、あ、うん。わかつたわ」

はつとして返事をすると、名残惜しげに時々振り返りつつ、ルークが行く先をついていった。

露天ではさまざまな作物が並べられ、軽快な売り声が道々に響いていた。

ルークはその活気に驚き、歓声を上げた。

さつきまでの不機嫌はどこへやら、周りをキョロキョロと見渡している。

エンゲーブの町を外から見たときは、汚いだの狭いだの臭いだの

散々文句を言い放っていたがそんなことも忘れて、道々に並んでい
る店を夢中で見ていく。

ティアはそんなルークになんともいえない表情を向けていたが、
横から店主の引き止める声に足を止め売り物に目を向けた。
と、そのまま店舗で店主と密が噂話を始めていた。

「おお、聞いた聞いた！ 漆黒の翼がマルクト軍に追いかかられてた
んだろ？」

「ああ、危機一髪のところを華麗に逃走したらしくぜ

「ローテルロー橋が落ちたってな

「まあ、追い詰められたらなあ。でももしかしたら漆黒の翼じゃな
くマルクト軍が・・・」

「馬鹿、マルクト軍がするわけ無いだろ？」

「そんなもんか」

「しかし、漆黒の翼もよつとよつて橋を落とすなんて・・・」

「まったくだ、流通が・・・」

『さう見たいね・・。』『さうがいいかしい』

『さうがいい、あのとその翼は漆黒の翼とやらのせこじこな

2本のとうもろこしをつかんで比べるようにして見てるティアに、
アーチャーは迷わず片方を指し示すと、呆れたように続けた。

『それヨリいいのか?』

『へ?』

こんな旅の途中で貰つてどうあるのか、ホクホク顔でとうもろこしを貰い込むティアにアーチャーは苦笑交じりに指差した。

指先の向いではルークが店先のりんごを前に店主と大騒ぎをしている。

片手に食べかけのりんごを持つておろおろしているようだ。
大変!と貰つたものを仕舞い込むと、慌ててティアは走り出した。

ルークは綺麗に切つたりんごを頬張りながら、羽ペンを滑らせていた。

軽い気持ちで齧つたりんごせいで酷い目にあつた。

漆黒の翼という盗賊と勘違ひされて、町の男たちに囲まれて引きずられた拳銃、ローズつていうおばさんとジヨイド・カーティスつていう嫌味なおっさんの前に突き出されたのだ。

後からやつてきたティアはティアで、下手にファブレの名前を名乗るなつて指図してくるし。（それにしても、齧つたりんごの代金

はティアが払つてたし、食べ物でなんであんなに騒ぐんだろう?）

ティアがそのカーティス大佐?に漆黒の翼はマルクト軍が追いかけてただろということを話してるところで、導師イオンつてのがひよつこりと顔を出してチーグルが盗んでいつたつて言い出した。
引きずつていつたおっさんたちは謝つていたけど、腹の虫がおさまらねー。

ティアはなんか機嫌が悪いし、アーチャーは嫌味たらたらだし・。

「ひひひりと、こままでの」とや今日あつたことなどを見や記して「ぬといひで、ひょひじつとティアが頭越しにノートを覗いてきた。

「ルーク、何を書いてるの? ?」

「うわ、見んなよ」

「「」みんなさい、でも・・」

「あーもひ。ただの日課ー記憶障害が再発したときのために日記をつけとけって言われてるんだよ」

「・・記憶障害?」

探るよつな皿に皿をそりしてルークは言葉を続けた

「10年前の」とはぜーんぶさつぱつ。一つも思ひ出せやしねー。
それなのに危ないから屋敷から出るなつて、ずーっと屋敷の中で
軟禁。やつてらんねーよ」

「それはいかんな」

アーチャーは音も無く姿を現すと、訳知り顔で話し始めた。

「記憶を取り戻したいのであれば屋敷の中ことじめとおくよつも、
さまざまな場所に行つてさまざまな経験をつむべきだ。

今まで行つた場所や思い出の場所、友人知人に会つてみるのもよ

いな。とにかく現状維持など悪手としか思えん

「そうね、今までとは違う場所で働くのもいいかも。
例えば果物屋さんとか？」

「やうだな、運搬行や農業なども運べ無いだろ?」

「あと、ぬいぐるみを着る仕事とか、ドレスを仕立てる仕事とか」

「ふむ、舞台で女形をやるのも似合つかも知れんな」

「そんな仕事やつてられるか、馬鹿！」

「口の中に放り込んだりん」は何故かすっぱかった。

第六章 ローレライ教団の象徴

不機嫌な顔でルークはベットに飛び乗った。

いつも一人して人をからかいやがって！

そんな風に思つて、彼は組んだ足に肘をついて手に頬を乗つけたまま唸つた。

だいたいなんだ？なんで食べ物が盗まれただけで、あんなに大騒ぎするんだ？“いつもこいつもわからねー。

宿屋の丈夫で素朴なベットは彼を乗せて軽く軋んで、清潔な木綿のシーツは太陽の匂いがした。

屋敷の優雅な生活に慣れているルークにとつて、そんな素朴で質素な宿屋はとても違和感の感じられるものだった。

落ち着いて見て見れば、旅の途中にあれだけ望んでいた宿屋も自分が屋敷と比べてしまつて、不満ばかりが胸に浮かぶのだった。

それをなんでもないことのようにして、隣でくつろいでるティアを見ると何故だかいいらして、どうしていいのかわからなかつた。

ティアは手元に地図を広げて、これから道筋を確認しているふりをしつつ、機嫌の悪そうなルークをちらちらと見ていた。

アーチャーの機転で気まずい雰囲気になるのは避けられたが、彼の機嫌は最悪でちょっと突つつくだけで風船のように弾け飛びそうだ。

そんな不器用な二人をアーチャーはやれやれと見ていた。

サーヴァントは子守やお見合いを取り持つためのものではないのだがなあ。

そんな風に思つて、軽くため息をついた。

そういえば、と言葉を譲り合つような雰囲気の中でアーチャーが話しかけた。

「あの導師イオントークのは何者だね？
あの年でずいぶんと敬われているようだが」

「わづね、ローレライ教団のことは説明したかしら」

「ああ、天才譜術士ユリア・ジュー工が残した2000年に渡るすべてを記録する預言^{スコア}だつたかを守り、預言を詠む事で人を導くという世界的な宗教団体だつたな」

「そう、導師イオントークはローレライ教団の最高指導者よ。
マルクト帝国とキムラスカ・ランバルティア王国の休戦に尽力した方で、平和の象徴とも言われているわ」

アーチャーは顎に手を当てて、難しい顔をしてティアを見た。

「なんでそんな人間がこんな辺鄙な場所に・・・」

「ええ、どうやらあのカーティス大佐と行動しているようだけど、
いつたい何のつもりなのかしら。
導師守護役^{フォンマスター・ガーディアン}がそばに付いているみたいだから、ローレライ教団も
公認の旅なのだと思うのだけれど・・・」

「導師守護役？」

「導師の親衛隊よ。神託の盾騎士団の特殊部隊、公務には必ず同行するの」

「しかし、わざわざマルクト軍の大佐と行動するなど不自然だな。軍と行動せずとも教団にも兵力は存在するのだろ？」

「ええ、神託の盾騎士団というのがそれにあたるわね」

「ふむ、神託の盾騎士団を使えない理由があるのか・・?
どうしてもマルクト軍に頼まなければいけない理由があるのか、
それとも強制されているのか」

「強制されてるって感じではなかつたわ」

「それは一見しただけでわかるものもあるまい」

「やうだけど」

「あー、うつせーー！」

ルークは話を途中まで興味しんしんで聞いていたが、導師がマルクト軍と行動している理由の考察に入ると、そのまどろっこしさにいらいらし始めた。

「ぐだぐだ言つてねーで直接聞きに行けばいいじゃねーか。めんどくせー。

だいたいなんだよ、チーグルつて。聖獣だか何だかしらねーがなんでわざわざ食料庫なんざ漁るんだよ」

「ルーク、直接つて言つても彼らが正直に話すわけ無いでしょ。
目的によつてはこちらが排除されることだってありえるわ」

「ティア、先ほどから気になつていたのだが、チーグルとはなんだ？」

「ずいぶんと、大切にされているようだが、

「東ルグニカ平野の森に生息している草食獣よ。始祖ヨリアと共にローレライ教団の象徴になつてゐるわ。

生息地は、そうね、ちょいびの村の北あたりかしり

「ふ、聖獣がこそ泥か。聖獣とやらもずいぶんと落ちたものだ」

「アーチャー、そんな言い方ないわ。そつ、きっと何か理由が・・・」

「

「理由があるうとなかるうと泥棒は泥棒だ」

「あーめんどくせー。決めた！ チーグルの棲む森つてのはエンゲーブから北だつて言つてたよな？」

「え、ええ、それがどうかしたかしら」

「明日になつたらその森に行つて、そいつらが泥棒だつて証拠突き止めてやる」

「はあ？」

「こままじや、帰るに帰れねー。やつてもいないことを押し付けられるなんて我慢なんねーよ。せつちり締め上げてギッタンギッタンにしてやる」

「ルーク、何もそこままでしなくても・・・。
でも、チーグルかあ。チーグル・・・みたいかも」

「ティア？」

「え、いやあのその、わざわざ聖獣に指定したくらいだからきっと可愛いいに違いないと思つたり思わなかつたり、でもちょっとあのその…」

ティアは両手をぶんぶんせせて首を振りながら「そんな」とを言つた。

顔を赤らめて恥じ入るよつて言葉を詰まらせる。

アーチャーは眉間にしわを寄せて額に手を当てて、痛みをじりるよう黙り込んだ。

そんな一人をルークは首をかしげて見ていたが、発明家が発明の糸口を見つめたかのような笑顔を浮かべると、ティアのすぐそばに走りよつた。

広げた地図をわたわたと片付けているティアのすぐそばにしゃがみこみ、にかつと笑つていつた。

「じゃあね、一緒に行こうぜ」

「一緒に？」

「そう、一緒に」

困りきつた顔でルークを見つめるティアに、焦つたよつて顔を背けて顔を搔き、もぞもぞした態度をしていたがすぐに開き直った態度で叫んだ。

「いいから、明日、絶対、行くの！」

「私は反対だ」

「え？」

アーチャーは黙り込んでいたが、皮肉っぽい表情でそう言い捨てた。

「マルクト軍がつらつらしてこるよつなどして物見遊山など正気とは思えん。

ただでさえ、キムラスカの貴族なんていう爆弾を抱えているのに、ついつま回らぬなど虎の尻尾を踏みに行くよつなものだ」

「はあ？ なんだよそれ。俺が悪いって言つのか？」

「ああ、お前が悪い」

「・・・」

「・・・」

「サービスアントとして、マスターをキムラスカとマルクトのゴタゴタに巻き込ませるよつな真似はできないな」

「ひひせーな！ なんかあつたら、俺が！ 親父に頼んでも何とかしてめーはおとなしく後ろでひじりじしてろー。」

「ほひ、その言葉間違えないな？」

「も、もちろんだよ」

「と、彼はいつてるがどうする?..」

緊迫した彼らの言い合いに、言葉も挟めずにおろおろしていたティアは、いきなり言葉を振られてびくつとしてアーチャーを見た。
「私としては反対だが、マスターがどうしても行きたいというのであればマスターの意思を尊重する。サーヴァントとして最大限マスターの安全を保障しよう!」

ティアは不機嫌なルークと皮肉げな表情をした己の従者を交互に見たあと、己の意思を控えめな表情で述べたのだった。

色鮮やかな緑が日の光に輝き、何かの鳴き声が木々に反響して聞こえる。

アーチャーは護衛対象の一人からわずかに離れ、木に登つて上から彼女らを見ていた。

ルークは相変わらず偉そうに何事かをあれこれと言つて、ティアはティアでそんなことを気にも留めずに忙しなく周りを見渡し、あれこれと指し示しては何かを言つていた。

そんな二人を木の上から暫く見ていたが、彼女らが行く先に何かが起こっているのに気づいて、己のマスターへ急いでそのことを伝えることにした。

「え? イオン様が?」

「あん? どうした? あの陰険白髪親父がまたなんか言つてんのか?」

「・・あとで説教決定ね。それより！向こうでイオン様が魔物に襲われてるって、アーチャーが」

「せつめい・・、いやせつじやない、なんで魔物なんかに」

「急ぎまじゅう、護衛は一体何やつてゐるのー。」

そう言つてティアは森の向こうへと走り出した。ルークも慌ててその後を追う。

暫く行つた先に、白い法衣を着た少年が音叉をかたどつた杖を構えて虎のような魔物を見据えていた。

3匹の魔物は唸り声を上げて、じつじつとの包囲網を縮めようとしている。

「あれは、ライガだわ！」

「おいおい、やばくねーか？」

飛び掛つてくると見るやいなや、厳しい目つきで拳を振り上げて光輝く音素フォニムを手のひらに集め地面に手を打ちつけた。すると地面に光で書かれた譜陣が描かれて、一瞬にして魔物たちは光の中に消え去つていた。

疲れきつた顔を上げて立ち去つたが、立ちくらみを起こして崩れ落ちた。

「イオン様！」

「お、おい！」

二人は慌てた表情でイオンのそばに駆け寄った。ルークはすぐそばにしゃがみこみ大丈夫なのかと声をかける。

彼は繕つた笑顔を浮かべ大丈夫と答えた。

「少しダアト式譜術を使いすぎただけで・・・、ああ、すいません」

ティアの差し出した手を取つて立ち上がると、二人の顔を見て驚いた表情を浮かべる。

「あなた方は、確か昨日エンゲーブにいらした方ですね」

「ルークだ」

「ルーク。古代イスパニア語で『聖なる焰の光』という意味ですね。いい名前です」

彼はルークを見て優しげに笑つてそう言った。

その言葉を聞いてルークはすこし顔を赤くして、「そ、そつか」と言い捨てた。

「私は・・・、神託の盾騎士団モース大詠師旗下情報部第一小隊所属、ティア・グランツ響長であります」

畏まつたようなすこし厳しげな表情を浮かべて、ティアはルークに続いて自己紹介をした。

「ああ、あなたがヴァンの妹の。彼はいまだ行方不明という話です

が、あなたも彼を探しに？」

「いえ、まあ任務中です」

ティアは複雑な表情を浮かべ、視線をそらした。

「はあ？お前、ヴァン先生の妹なのか？つーか、行方不明って何だよそれ！」

詰め寄るルークに途方にくれたような顔をして周りを見渡して、あれ？といった表情を浮かべる。

「あれは・・・」

森の奥の木の影から長い耳の小さな影が素早い仕草で横切った。

「チーグルです！」

そうイオンが叫んだのを聞いて、ルークは彼女と小さな影を見比べた後、「あとでしつかり説明しろよな」と叫んで走り出した。

その後姿に、ティアは額に手を当てて軽くため息をついたのだった。

第七章 彼らの理由

「余計なことを言つてしまつたでしょ？」「

額に手を当てて難しい顔で考え込むティアに、イオンは気遣わしげに彼女を見上げて、労わるような声で尋ねた。

「いいえ、遅かれ早かれ知られることですから・・・」

ティアはどこか力なく笑つてそう答えた。

「おい、お前ら早く来い！見失つちまつじやねーか

ルークの叫び声に一人は顔を見合わせた後、苦笑しあつて歩き出した。

「あーもひ、のろのろじてるから逃げられちまつた

周りを見回しながら小走りで一人のすぐそばに戻つてみると、既にしげに舌打ちをしてはき捨てた。

ティアはふつと虚空を見つめ黙り込んだ後、まっすぐ彼方を指差した。

「チーグルはあつちに行つたみたい、巣があるのかしら」

とても驚いた様子でイオンは彼女を見た。

「確かに聞いた話では、チーグルの巣はこの先に行けばあるはずで

すが・・。

しかし、何故？」

「企業秘密です」

ティアは「こりと笑つて疑問を封殺するかのよつに答えた。

それを横で見ていたルークは呆れたように鼻を鳴らしだが、ふつとイオンを見て眉をひそめた。

「つたく、ふらふらじやねーかよ。ろくに戦えないせに、こんなところに来るんじやねーよ」

「すいません、ですがエンゲープでの盗難事件がどうしても気になつてしまつて……」

「はあ？ 何言つてんのお前？ 関係ないじやんか」

「しかし、聖獣と言われるチーグルが人に害をなすなんて、何か事情があるはずです」

そういうティオնはあごに手を当てて悩ましげに眉をひそめた。

「チーグルは魔物の中でも賢くて大人しい。人間の食べ物を盗むなんて、おかしいんです。チーグルに縁がある者としては、見過ごせません」

「魔物のことなんて、放つときやいいだろ」

「そうですね。僕は変わり者かもしだせません」

ルークの無神経な言葉に、イオンは一瞬黙り込んで傷ついたような顔を浮かべたが、押し隠すように固い言葉で答えて矛盾する優しい笑顔を浮かべた。

「ですが、チーグルと接触できれば事の真相がわかると思います」

ルークは馬鹿にしたような顔で彼を見たが、断固とした態度を崩さないのを見て、呆れたように肩をすくめた。

「ふーん。つまり、目的地は一緒つてことだな」

田をぱちくりさせてイオンはルークを見た。

「では、お一人もチーグルのことを調べにいらしたんですか」

「濡れ衣着せられて大人しくできるかつての」

鼻を鳴らしてそんな風に答えた後、ティアを指差して

「こいつはただ単にチーグルを見たいだけだけどな」

「ちょっとーわざわざそんなこと言わなくていいじゃないー」

ルークの大暴露に、顔を赤く染めて食つてかかった。今までの借りを返してやつたぜと言わんばかりの勝ち誇った顔で一ヤ一ヤしている。

「もー、イオン様の前でそんな話しないでよね。

・・イオン様、ここはとても危険です。ここから先は私たちが調

「いいえ、どうしても今回の騒ぎの真相が知りたいのです。」

「いいえ、どうしても今回の騒ぎの真相が知りたいのです。」

ティアの冷淡とも取れる言葉にイオンは慌てて、言いすがつた。

「チーグルは我が教団の聖獣ですし、彼らのやつたことは教団にも責任があります」

「あーもう、仕方ねえな。お前も付いて来い」

「ちよ、ちよとルーク！」

食つてかかるティアに軽く追い払つよう手を振りながら、めんどうをそつに答えた。

「こんな青白い顔で今にもぶつ倒れそうな奴、ほつとく訳にもいかねーよ。

それに村に送つて行つたところで、また一人でノコノコ森へ来るに決まつてる」

「あ、ありがとうございます！」

その言葉にイオンは顔を輝かせて、明るい声を上げる。
「ずつと身体を近づけて「ルーク殿は優しい方なんですね！」と笑つた。

ルークは顔を赤らめてそっぽをむくと、「アホなこと言つてねーで、大人しく付いてくればいい」などと言い放つた。

「あ。あと、魔物と戦うのはこっちでやるから、あの変な術は使つなよ？」

お前、それでぶつ倒れたんだろ？」

「ま、守つて下さんですか！ 感激です！ ルーク殿」

それを聞いて慌てきつた表情で振り向いて、ほんの少し後ずさつた。

赤い顔はさらに赤くなっている。

「お、大げさに騒ぐなっ！ 違うって、足手まといだつってんだよっ！ それと、俺のことば呼び捨てでいいからなっ！ 行くぞー！」

「はい！ ルーク！」

イオンは嬉しくてしようがないといった感じで頷くと、逃げるよに森の奥へと走り出したルークの後ろを追いかけていった。

彼らの後姿をティアは物足りなさそうな羨ましそうな顔で見ていたが、ふと虚空を見つめくるぐると表情を変えた後、慌しく逃げるよに追いかけていった。

その後ろから、どこからともなく赤い騎士の笑い声が聞こえた気がした。

それから、木々の隙間を縫うように続く道をしづら歩していくと、小山のような大木にぶち当たった。
木の幹に捲るよに大きく穴が開いている。

どうやらチーグル族の住処はこの木のつるの中にあるようだ。

イオンは無造作にその穴の中へ歩いていった。

追いかけるように続くルークの後ろで、ティアは軽く後ろを見渡して白い手袋を付け直すとしっかり杖を握りしめてその後に続いた。

つるの中はとても暗く、空間を支えるようにして無数の枝が絡み合つように伸びていた。滴るような緑色の苔が上から降り注ぐ日の光に輝いて、暗い中の辛うじて足元が見えるだけの光を確保していた。

ルークとイオンは言葉を交わしながら、つるの中にいる大量のチーグルたちを見ていた。

その後ろからティアが入つてくると、チーグルたちは何に驚いたのか怯えたように後ずさり、ついには積み重なるようにして壁際に張り付いてしまった。

ティアは驚いたように田を見開いていたが、やがてふと顔を緩めた。

すると何故だかチーグルたちはほつとしたようで、小山のようだつた塊はなだれのように元にもどつていった。

その流れにイオンは不思議そうな顔をしていたのだが、そんなことを考へていて暇はないと考えて、チーグルたちに近づいていった。

チーグルたちの群れがわずかに左右に割れて、年老いた様子のチーグルが大きな腕輪をもつて現れた。

「おぬしたちは・・・コリア・ジユヒの縁者、か？

恐る恐るといった風に老いたチーグルは明瞭な言葉で問い合わせて

きた。

「おわつーま、魔物が喋った！」

「ユリアとの契約で『えられたリング』の力だ…。
お前たちはユリアの縁者か？」

イオンは軽く頷くと、誇るように名乗りを上げた。

「はい。僕はローレライ教団の導師イオンと申します。
あなたはチーグル族の長とお見受けしましたが」

「いかにも」

それを聞いて、ルークは傲慢な態度で指差して言い放つ。

「おい、魔物。お前ら、ヒンゲーブで食べ物を盗んだだろ」

「…なるほど。それでは、我らを退治に」といつ訳か?」

「はつ、盗んだことは否定しないのか」

「チーグルは草食でしたね。何故人間の食べ物を盗む必要があるのです?」

「…チーグル族を存続させるためだ」

イオンのすぐ横に並んで立っていたティアは無言で杖を握りなおした。

すると、チーグル族の長は慌てたように「ま、ほんどうだ!」と

言い募つた。

「わ、我らの仲間が北の地で火事を起こしてしまったのだ。その結果、北の一帯を住み処としていたライガが、この森に移動してきたのだ。我らを餌とするためにな」

イオンは納得したよに頷いた。

「では村の食料を奪つたのは、仲間がライガに食べられないようにするためなんですね」

「ああ、そうだ。定期的に食料を届けぬと、奴らは我らの仲間をさらつて喰らつ」

「そんな、なんて」と・・・などと咳くイオンの横で、ルーグは忌々しげにはき捨てた。

「はんつ、なんだよそれ。弱いモンが食われるのは当たり前だろ？しかも繩張り燃やされた？頭にも来るのも当然だろ？よ」

「しかし、しかしそうかもしませんが、そんなものは本来の食物連鎖の形とは言えません！」

黙つて言い争つ二人を見ていたティアは難しげな顔をして口を開いた。

「さて、どうしましようか？

チーグルが食料泥棒の犯人だと判明しましたけど、村に突き出したところで今度はライガたちが餌を求めて村を襲うでしょうね」

「じゃねーよ、あんな村なんか」

ルークはふてくされたように言ひ捨てた。

「そりは行きません。エンゲーブの食料は、このマルクト帝国だけでなく世界中に出荷されています。あの村を失うわけにはいかない」

「食料の流通が滞れば飢え死ぬ人だつて出てくるでしょうね」

二人は厳しい口調で次々とエンゲーブの重要性を説いた。
ルークはうろたえた様子で一人を見て、むくれたように顔を背けた。

「じゃあどうしたらいいんだよ

「ライガと交渉しましょう」

「はあ？」

「交渉……ですか？」

イオンの提案に一人は驚きの声をあげる。

「そのライガつてのも喋れるのか？」

「僕たちでは無理ですが、チーグル族を一人連れて行つて訳してもらえれば、もしかしたら……」

「では、通訳の者にわしのソーサラーリングを貸し与えよう」

長老が群れに向かつて呼びかけると、群れの中から水色の毛をしたチーグルがおずおずとした様子で顔を出した。

長老に比べて一回りほど身体が小さくて、どうやらチーグルの子どもらしい。

「なんだ？」

「この子どもが北の地で火事を起した我が同胞だ。これを連れて行つて欲しい」

長老から腕輪を受け取ると口を開いた。

「//コウですの。ようじくお願ひにするのですの」

「・・・なんかむかつくや、おい」

こうしてルークはチーグルをにらみつけた。

「いのんなさいですのー」

「だあー、あやまるなーうつせー」

そんな理不尽なやり取りに、ティアはいつものように呆れたと言わんばかりのため息をついていた。

第七章 彼らの理由（後書き）

ほほ、原作じおつの流れになります。
アーチャーの出番ほほとんどなし。『めんなさい。

第八章 守るべきもの

ライガクイーンの住処から遙か遠く、木々を挟んで肉眼では目視できない位置にアーチャーは立っていた。

太い枝の上に立ち、鷹の目を光らせてその獲物を確かに捕らえている。

アーチャーは『』を構えて100分の1秒も目を離すことなくその姿を見据えていた。

『』のマスターを含む3人がその魔物に近寄るのを確認して、思つままに振るまえない自分に歯噛みした。

交渉などリスクが高すぎる。どこかに行つて下さいと言つて素直に従うなど、楽観的にもほどがあるぞ。あの導師はいつたい何を考えているのだ？

ままならない状況に苛立ちつつも、マスターの指示が飛ぶのをただひたすらに待ち続けていた。

ルークは唸り声を上げて『』のライガクイーンを見上げていた。

優雅にさえ見える毛並みは激しく逆立つて、白い牙をむき出しにして今すぐにでも襲いかかってきそうだ。

その威圧感に思わず剣の柄に手が伸びる。

ティアもすぐにでも詠唱を開始できるよつこと、すでに杖を構えていた。

「ミコウ、ライガ・クイーンと話してください。

私たちは交渉しにきたのだと」

イオンは武器を構える一人を制して、前に出て通訳する奴が立つを促した。

「元気に返事をして、ライガクイーンに近づいてまくして立てるよつに鳴きだした。

それを見てルークはなんとも嫌そうな顔をして、ティアは顔をすこしほじろばせている。

ライガクイーンはゆづくと身を起こすと頭を下るよつに前に出た。

懸命に何かを話しているユウを睨みつけ、振り払つとうに抱躋をあげた。

「ユウは風圧に弾き飛ばされ、それをあわててイオンが抱きとめた。

「いますぐ去れつて、卵が孵化するといつだから来るなつていつるですの」

「まずいわね、卵を守るライガは凶暴性が増すはず。
イオン様！ いつたん撤退して軍に援軍を要請しましょつ」

「はあ？ まじかよ」

「卵が孵ればライガの仔らは大挙して街に襲い掛かるわ。放つておけばエンゲープの街丸々一つが消滅しかねない」

「いけません！ ユウ、ライガクイーンにお願いしてください。

この土地から立ち去つてほしいと」

「みゅ！ みゅうみゅうみゅ・・・みゅ――」

猛烈な叫びを上げて女王は前に歩み出る。

ミコウは泡を食つて逃げると、切羽詰つた風に訴えた。

「みゅー、ふざけるなって言つてますの一。

ボクたちを殺して、孵化した仔ビモの餌にすると言つてゐるのです」

「そんな！」

「イオン様お下がりくださいー。」

ティアは睡然とするイオンの腕を引いて彼の前に立つた。横にいるルークも剣を構える。

「おい、じんなところで戦つたら卵が割れるんじゃないのか？」

「かまわないわ、早いか遅いかの差よ」

「なんだよその言い方！」

「放置して孵化させてしまえば飢えたライガが街を襲つわ。生まれてくる仔らに罪は無いけど、もうしかたないわ」

「はあ？ 意味わからぬー」

「来るー。」

ティアはイオンにもつと後ろに下がるように指示すると、襲い掛かってくるライガの前にシールドを開いた。

まいづくライガを睨みつけ、即座に離脱して横面から田を狙つて

ダガーを投げつける。

シールドを前足で叩き割つてダガーを避けると、激しい咆哮を上げ雷撃が上空から降り注いだ。

命からがら避けたルークは、ティアに向かつて飛び掛るライガクイーンを見て心臓を縮み上がるが、再び展開したシールドで防いでいるのをみてホッとすると、ライガクイーンに飛びかかった。

ライガクイーンの背面に勢いよく剣を振り下ろすが、強固な毛皮に跳ね返されてその衝撃で後方に跳ね飛ばされた。

『ティア』

と、どこからともなくアーチャーの呼び声が聞こえた。

『なに？ あなたの出番はまだよ。導師がいる前であなたを使えない』

焦つたようにティアも念話で答えると、苦笑交じりで返事をかえす。

『まあ、それもあるが。後ろ、観客が来てるぞ。
・・ふむ、どうやら演劇は強制終了のようだ』

何を感じたのか、ティアは術式を放棄して飛び退った。

「インディグネイションーー！」

上空から激しい雷撃が降り注ぎ、ライガクイーンは黒い煙を上げ

ながら倒れ伏した。

その衝撃で土煙が上がり沈黙が降り注ぐ。

「ジエイドー！」

イオンのその言葉にルークとティアは構えをといた。

「「」無事ですか？ みなさん」

ジエイドはメガネを押さえて、口と鼻に囁く笑顔を浮かべた。

言葉を交わしているイオンとジエイドを横田に、ティアは卵が置いてあるライガの巣に歩み寄った。

いくつかはすでに割れているが、運がいいのか悪いのか一個だけ割れずにそのままの姿で残っている。

ティアはそれを見ると顔を歪めたが、すぐに息をついて杖を振りかぶった。

と、その後ろからルークが腕を掴み取り、乱暴な仕草で引き止めた。

「なんてことしゃがるんだ！」

「止めないでー！」

「やめんな、せっかく割れずにすんだの！」

「さつさも言つたでしょー 残しておこたら、あとあと酷いことになるわ」

「だけど！」

「あなたね、生かしておいてその後のことを責任取れるの？ できもしないくせに横から口出ししないで」

「ふざけんな。」Jの冷血女！』

言い争う二人の横で、ピキピキと卵に亀裂が入り中から何か打ち付けるような音が聞こえてきた。

それにも気づかず二人はいい争いを続けていた。

横でおろおろしながら見ていたミュウは、それに気づいて恐る恐る卵に近づいていった。

と、卵から突き破るように縞模様の顔が卵の殻を突き破った。

ミュウはびっくりして逃げ出そうとしたがそれよりも早くに卵がバランスを崩して倒れるようにミュウの上にもたれかかる。

哀れミュウは卵の殻と生まれたてのライガの下敷きになってしまった。

「みゅ――！」

生まれたてのライガはミュウを興味津々の顔で見ていたが、おもむろに大きな口をあけてぱっくりと・・・するところで、ルークに救い出された。

ルークはライガの首根っこを掴んでまじまじと見た。

さつきまで対峙していた女王に比べれば凶暴さなどかけらもなく

て、くぐりくぐりとした目がルークを見つめている。

「ルーク、それを貸して」

ティアはダガーを構えて冷たい目で手を差し出したが、ルークは慌てて抱きしめて後ろに隠した。

「嫌だよ、せつてー やだね」

「ルーク！！」

「だめだ！殺したらだめだ！」

「あなたね・・」

「おやおや、まるで子猫を拾つた子どもと母親のよひですねえ」

言い争つてる上から必要以上に朗らかな声が降つてきた。
ジョイドは一人を面白そうなくで見ている。

「いいんじゃないんですか？ 彼が責任とつて育てるつて言つてる
んですし」

「カーテイス大佐！」

「苗字は呼ばれなれていませんから、ジョイドでいいですよ。
彼が責任を取つて引き取つて育てれば何の問題もないんじゃない
ですか？」

「もちろんそうですよね？」

ジョイドは観察するようにルークを見てそう言つた。

「ああ、俺が責任とつて育てるよ。それなら文句無いんだろう?」

「それは・・・」

ルークの言葉に心なしか身体を小さくしてうつむく。

「なら問題ないだろ?いいな?」

背中をよじ登りルークの赤い髪の毛をガジガジしてくるライガを撫でながら偉そうにティアに言つた。

ミコウはそんな二人をあらあらしながら見てくる。

「じゃあ、お話は終了」ということで森から出しあつた

「駄目ですの。長老に報告するのです」

小さな身体を精一杯動かして、ミコウはジョイドに訴えかけた。

「魔物が人間の言葉を?」

「ソーサラーリングの力です。それよりも帰る前にチーグルの住み処へ寄つてもらえませんか?」

「いいでしょ。しかし、時間がないことをお忘れにならなによつ

「」

イオンの要請に頷いて、一人を見やると背を向けて歩き出した。

ルークたちもイオンに促されて、荒れ果て主を失った住処を立ち去った。

ライガの子どもはルークの頭に乗つて、しつぽをゆらゆらとわせていた。

ティアはそれをチラチラと見ては、ハツとしたように皿を背けていた。

しかし、誘惑に勝てなかつたのかふらふらつと手を伸ばす。

それに気づいたライガは歯を剥き出しにして唸りだした。ティアはしょんぼりして手を引っ込む。

「嫌われてやんのー」

ルークの言葉に反抗する気力もなく、彼女は弱々しい声でほつといてよと呴いた。

しばし一人は黙つたまま歩いていたが、ティアが突然何かに気づいたようで、周りを見渡すとあさつてのぼつに走り出した。

止めるまもなく奥へと走つていつたと思ったら、片手にりんごを持つて走りよつてきた。

「生まれてきたばかりなら、おなかがすいてると思うわ。ぴつたりとは言わないのでないよ今日はましね」

ダガーを取り出してりんごを一瞬に切りだし、その切れ端をライガに差し出した。

ルークは思わずライガを隠したが、ライガは興味心身でりんごの切れ端を見ていた。匂いにつられてぱくりと噛み付く。

しばらぐ、しゃくしゃくとした咀嚼音が森に響いていた。

あちこちに果汁が飛び散って、ルークはいらつとした調子で文句を言った。

「きたねーな。髪がべたべたするだろ」

「我慢しなさい、責任取るんでしょう？」

「そうだけどよー」

そんな二人をジェイドは興味深げな目で観察していた。

チーグルの住処にて報告を済ませた後、一行は手を振つて送り出すチーグルを背に歩き出した。

新しく仲間になったミコウも一行にまざり、時々振り返つて手を振りつつ置いていかれないよう懸命に足を動かしていた。

「ご主人様、待ってくださいですのー」

「あー、うつぜー」

ルークはまわりついてくるミコウを振り払いながら、不機嫌そうに歩いている。ミコウは何を思ったのか、ルークを自分の主人と定めたようで、追放処分を受けている間はルークのそばを離れないと言つのだ。

とてもじゃないが受け入れられない話だったのだが、周りの進めもあつてしまふじぶながら受け入れることになった。

頭の上でもそもそ動くライガを支えながら、氣だるげに歩いていると、やがて森の出口にたどり着いた。

「ん？ あいつお前の護衛役だよな」

先ほどライガの巣の中で、ジョイドに耳打ちされて走り去つていたツインテールの女の子が、森の出口でにこやかな笑顔を浮かべて立っていた。

何故かライガが唸り声を上げ始める。

「ええ、アニスです」

おかえりなさいと明るく少女が言つ横から、マルクト兵が続々と走りよつてきた。武器を構えてルークとティアを取り囲む。

「『』苦労様、アニス。タルタロスは？」

「ちゃんと森の前に来ちゃつてますよ。大佐が大急ぎでつて言つから、特急で頑張っちゃいました」

ルークがどうこうことだと言い寄るのも無視して、前に立つマルクト兵たちに指示を飛ばした。

「『』の一人を捕らえなさい。正体不明の第七音素を放出していたのは、彼らです」

「ジョイドー乱暴な」とは・・・

「「安心ください、イオン様」

につ、つと笑って、ジョイドは答えた。

「何も殺そうといふわけではありませんよ。お一人が暴れなければ、
ですがね」

ルークは思わず黙り込み、ティアは強い目でジョイドを睨みつけ
ていたが、二人とも武器を下ろして抵抗をやめた。

それを確認するジョイドは連行するよう言い放ち、兵士たちは
武器を取り上げて、縛り上げると乱暴にタルタロスへと連行していく。

ルークは無言で隣を歩くティアを見て、ぎゅっと拳を握り
締めた。

NGシーン 第5章～第8章（前書き）

本編とは一切関係ないコネタ集です。
読まなくても何の問題もありません。
息抜きにどうぞ。

第5章

それよりいいのが?』

17

こんな旅の途中で買つてどうするのか、ホクホク顔でどうもろこしを買い込むティアにアーチャーは苦笑交じりに指差した。

つなぎを着たいい男がルークに何か言つていた。
そして、ぽんと肩を叩いて・・・！

「だめ……や、やがれ……」

荷物をしまるのもそこそこ騒げ出した。

ティアは顔をそつとルークの耳のそばに寄せて小さな声で話し始めた。

「サーヴァントのこと」を話すとね、頭に木が生えてね、その木に実がなるの。
そしたら、その実を狙つてたくさんの鳥がよつてきてね、木も毛も何もかも筆られちやうの。

やしたらね、その穴に水がたまつてね、魚が泳いで魚釣りができるようになるの」

「まじで？」

「うそ、ほんと？」

アーチャーはどこかでそんな昔話を聞いたなあと遠い田をしていた。

第6章

「魔女めしょく、護衛は一体何やつてゐるのー。」

そう言つてティアは森の向こうへと走り出した。ルークも慌ててその後を追つた。

暫く行つた先に、白い法衣を着た少年が首叉をかたどつた杖を構えて、熊のきぐるみを被つたモースが懸命に何かを渡そうとしていた。

「おじさん（？）おじさん（？）忘れ物ですよ」

「あら熊さんありがとうございます。」

お礼に アカシック・トーメント ーーー」

だれがお嬢さんだーー!といつ声が森に響いた。

森の奥の木の影から銀色の小さな影が素早い仕草で横切った。

「はぐれメタルですーー!」

そうイオンが叫んだのを聞いて、ルークは彼女と小さな影を見比べた後、「待ちやがれ! 経験値! ! ! 」と叫んで走り出した。

第7章

「余計なことを言つてしまつたでしょ? つか? 」

額に手を当てて難しい顔で考え込むティアに、イオンは気遣わしげに彼女を見上げて、労わるような声で尋ねた。

「いいえ、泣いて謝るまで嫌いなにんじんを食べさせればきっと泣かせてくれます」

朗らかな笑顔でティアはそう答えた。

得体の知れない悪寒に襲われて、ルークは思わず振り向いた。

その後ろからティアが入つてくると、チーグルたちは何に驚いたのか怯えたように後ずさり、ついには積み重なるようにして積みあがつていった。

そして、チーグルたちは合体し、巨大な顔が目の前に立ちふさがつた！

キングチーグルが逃げ出した！

しかし、足が無いので動けない！！

第8章

横でおろおろしながら見ていたミュウは、それに気づいて恐る恐る卵に近づいていった。

と、おもむろに卵が上下真っ二つに割れて、しましまのライガが顔を出した。

ライガは卵の殻を両手で支えて、軽快にリズムを取つて踊りだした。

噂によると、大きな街でダンサーとして一大ブームを巻き起こしたらしい。

しばし二人は黙つたまま歩いていたが、ティアが突然何かに気づいたようで、周りを見渡すとあさつてのほうに走り出した。

止めるまもなく奥へと走つていったと思ったら、両手でム、コロウを引っ張つて走つてきた。

「野生動物なら・・・「元の場所に戻してきなさい」ええーーー！」

ライガはしつぽをパタパタさせていた。

「めんなさい」、『めんなさい』。

それなりに溜まつたら、本編と分けてよつかなと思つてます。

第九章 選択肢の無い問い

仔ライガは目の前の檻をガシャガシャと叩いて、目の前に座るルークを見ていた。急いでしらえの小さな檻に入れられて、しょんぼりとした顔でしゃがみこんでいる。

あの後、ルークたちはそのまま陸上装甲艦タルタロスに連行された。

ルークとティアは椅子に座り、不穏な笑顔のジョイドを前にビビりなるのかと不安げな顔を浮かべていた。

ミコウもちやっかり椅子を与えられて、行儀よく座っている。彼らの前にはジョイド、イオン、アニスが立ち、ドアをしつかりと締め切つて、部屋はどこか息苦しい雰囲気をかもし出している。

「第七音素の超振動はキムラスカ・ランバルティア王国王都方面から発生。マルクト帝国領土タル渓谷附近にて収束しました。

超振動の発生源があなた方なら、不正に国境を越え侵入してきたことになりますね」

「・・・そういうことになるらしいな」

ルークは軽く顔を背けて、投げやりに答えた。

正直なところ、こんなよくわからない尋問なんてめんどくさくてやつてられないと思つていて。だが、だからといってよけいなことをして事態が悪化したらまずいと思うのだ。

こういうタイプはきっと、口を滑らせたら酷いことになる。（アーチャーがそのいい例だと思つ。旅の途中ではそれでしおりうる酷い目にあった）

「おや、自分のことなのに『ずいぶんと適当ですね』」

「「うぬせーむ」

やつぱりむかつく！

ムッとした顔でその苛立たしい顔を睨みつけた。

「ま、それはむずかしい」

ジードはあつれりと流して、言葉を続けた。

「ティアが神託の盾騎士団だといつゝとは聞きました。
ではルーク。あなたのフルネームは？」

「ルーク・フォン・ファブレ。

お前らマルクト軍が誘拐に失敗したルーク様だよ」

その言葉に彼らは驚いた様子でルークを見た。

「キムラスカ王室と姻戚関係にある、あのファブレ公爵の『子息・
・といづわけですか』

ジードは何か思い巡らせながら、控えめな調子で質問を重ねた。

その横でアースは何故か、目を輝かせてルークを見つめている。

「何故マルクト帝国へ？ それに誘拐などと・・・。
穏やかではあつませんね」

「俺の知ったことかよ。

お前らマルクトの連中が俺を誘拐したんだろうーが

「少なくとも私は知りませんね。先帝時代のことでしょうか

「ふん、こっちだつて知るか。

おかげでガキの頃の記憶がなくなつちまつたんだから

ジョイドは不審げに眉をひそめて何かを呟いた。

「な、なんだよ

「いえ、何でもありません。ただの独り言ですから。
それはともかく、今回の行動は・・・」

「誘拐の件はともかく。

今回の件はルークと第七音素の共鳴が起きてしまつたせいで、擬似超振動が起きただけです。ファブレ公爵家によるマルクトへの敵対行動ではありません

不機嫌な顔をしているルークの代わりに、ティアがそう言つた。
まるでティアとの間で起きたのだと言わんばかりの微妙な説明だつた。

「大佐。ティアの言う通りでしょう。彼に敵意は感じられません

イオンはその説明を真に受けた形で納得したようで、ふてくされてそっぽを向いているルークを目で示しながら、イオンが取り成してきた。

「・・・まあ、そのようですね。温厚な方のようですが、世界情勢には疎いようですし」

ルークはその言葉に、またムツとして「けつ、馬鹿にしゃがって」と呟いた。

「リリはむしろ協力をお願いしませんか?」

イオンの言葉に、ジョイドはびっくり切り出した。

「我々はマルクト帝国皇帝ピオニー九世陛下の勅命によって、キムラスカ王国へ向かっています」

「それは・・・まさか、宣戦布告?『いや、それはなからう。それならばイオン導師を引っ張つてくる必要はあるまい。』違つか、なら向のために・・・」

『まあ、ありがちなのは導師のネームバリューを使おうとこいつものだうな。戦争回避のために宗教を使うといつのまくあることだ』

『じゃあ、和平交渉? それにしても教団側の人間が少なすぎない?』

『それは・・・』

『あーもう一ハツキリしろ!』

無言で念話を交わしているティアとアーチャーの話を聞いていて、ルークは状況も忘れて叫んだ。

「おや、見た目通り短気な方ですね」

さりげなく失礼なことを言つジエイドに、周りは思わず苦笑を浮かべた。

ヤレヤレといわんばかりの雰囲気がアーチャーの方から漂つてきて、余計にむかついた。

「それはさておき、ぜひともあなたの力を借りしたいのです。

平和のために。」

そう言つて真剣な目でルークを見た。

「・・・しかし、いきなり手を貸してくれというのもおかしな話ですね。

こうしましょうか。これからあなた方を解放します。軍事機密に関わる場所以外は全て立ち入りを許可します。まず私たちを知つて下さい。その上で信じられると思えた力を使して欲しいのです。戦争を起こさせないために

穏やかな声でさう言つて、うかがうように黙り込んだ。

「・・・なんだよそれ」

か細い声で呟いた。

訳がわからなかつた。戦争とか和平とかそんな大事に巻き込まれるなんて、屋敷にいた時もあの森から今までの旅でも一度も想像していなかつた。

「協力してほしいなら、詳しい話をしてくれればいいだろ」

「説明してなお、『』協力いただけない場合、あなた方を軟禁しなければなりません」

「何・・・」

「『』とは国家機密です。ですからその前に決心を促しているのですよ。

どうか宜しくお願ひします」

ジードは宜しくお願ひしますという感じのしない、胡散臭げな笑みを浮かべて部屋のノブに手をかけた。

「詳しい話はあなたの協力を取り付けてからになるでしょう。待つていています」

ドアをくぐる前にそう言ひて部屋を立ち去った。

それについてイオンも部屋を出る。

アニスはそれについていくことなく、戸口に立つてこやかな表情で一人を見ていた。

「ちつ、なんだよあいつーむかつくなー」

『やれやれ、面倒なことになつたな。どうする?』

『とりあえず、逃走経路の確認だけはしておいて。』

あまり力を使いたくないけど、力づくでつてことも考慮に入れなきゃいけないから』

「おこ、無視すんなよ」

「『じめん』めん、で、じーするへ。」

「じーあるつーたつてわかんねーよ」

『やれやれ、我慢を言つた挙句これか。』これだからお坊ちやまば

アーチャーの言葉にムツとして口を開く前に、田で制して言葉を重ねた。

『『アーチャーは挑発しないの』

そうね。私にはなんとも言えないわ。

『じつことはあなた自身で決めないといけないもの』

「はあ、めんじくせー」

そんな調子のルークに対してアーチャーは皮肉げに言い放った。

『貴様が変な寄り道を敢行せねば、こんな事態に陥らざるにすんだかもな』

『それを言つなら、私にも責任があるわ。』

『護衛を重視するなら、私情は排除すべきだったもの』

『だが・・・』

『あーつむとい。周りに人がいるんだからいかげんにして。いいから、わざと偵察してきなさい』

『・・・了解した』

アーチャーはしぶしぶといった感じで返事をすると、音もなくその場から立ち去った。

念話をしている間、ティアは仔ライガに釘付けといった感じで籠の中を見ていた。人差し指を仔ライガの鼻先に突き出してくるくると円を書きながら、困った顔をしている。

それを盗み見しながら、ルークはため息をついた。

結局のところ、ティアは自分のことをどう思つてるのだろうか。屋敷のやつら見たく必要以上に命令しないが、相手にもしない。

アーチャーとばかり重要な話をして、俺のことはまるで眼中に無い感じだ。

エングーブの宿屋で、アーチャーにもしもの時にまだ元にかしてやると言い放ったが、実際のところ俺がいなくともどうにかするんじゃないだろうか？？

そんな後ろ向きなことを考えて頭がぐるぐるした。

思わず髪を搔き鳴つたら、ミコウがおおおおしながら「ご主人様元気だすですの～」と言つて顔のそばに近づいてきたので思わず床に呑きつてしまつた。

ティアはそれを見て「ルーク怖いねー。らいらいは気をつけるんだよー」と気楽な調子で仔ライガに話しかけてくる。やつぱり淡白な反応で、言ことつの無いイライラを感じた。

そんなことは氣にもせず、ティアは仔ライガから田を移し朗らかに提案する。

「……」「……」でも、暗くなるだけだし、せっかく自由にしていいって言つてきてるんだから船内を見て回らない？？

「私、こんな大きい乗り物に乗るの初めて！せっかくだから見て回りたいな」

そんな彼女の言葉に、口に立つてアーネスが小走りでよつてきた。

「ルーク様！よかつたら私が案内します。いいですか？」

そのテンションに驚きつつ、「別にいいけど」というと、一体何が嬉しいのか「ありがとうございます」と身をかわいらしくよじつて答えた。

立ち上がり、歩き出そうとすると仔ライガが懸命に檻を叩いて出ようとしている。ルークはそれをしばし見つめていたが、檻から出して頭に載せた。

「や、これましょー」と引つ張られるに任せ船内へと歩き出した。

アーネスはふつと足を止めて、ティアを上目づかいで見て恐る恐るといった調子で、どこか楽しげな雰囲気の彼女に「もしかして……私がいたらお邪魔ですか？」などと尋ねてきた。

その質問によくわからないといった表情で首を傾げて、「タルタロスの中のことわからぬもの。案内してもらわないと逆に困るわ」と答えた。

アーネスはそつと顔を伏せて、「天然？計算づく？手強い……」と

呟いた。

しかし、すぐに何事もなかつたかのように笑顔を浮かべた。

「それよりルーク様。タルタロスのビームに行きたいですか？」

ルークは困惑した顔で頭を搔こうとして、仔ライガが乗っているのに気づきそのまま仔ライガの頭を撫でた。仔ライガは「ううう」とのどを鳴らしている。

「あ？ どこつたってなあ・・・。

俺この船のこと知らねーもんよ。ティアは？」

ミコウはそれを見てムツとして飛び掛りしたが、その前にティアが持ち上げて頭に乗つけた。

「私だつて同じよ。任せるわ」

アーニスは一つ一つ丁寧に見学可能な場所を上げていく。
艦橋、休憩室、食堂、作戦会議室、寝室、機関室・・・。ルーク
が望むような面白い場所などあるように見えなかつた。

それでもやらないよりはましとばかりに、一つ一つ艦内を回つていいく。

頭に小動物を乗つけながら歩く一人の後姿は、どこか珍妙な雰囲
気をかもし出していた。

第十章 未熟な答え

突き抜けるような青空の下で、陸上装甲艦タルタロスは草原を土煙を上げながら走り抜けていく。

ティアは栗色の髪をなびかせて、甲板の上から望む風景を見ていた。

激しく吹きつける風を感じないかのじとく、微動だにせず視線は彼方の雲を追っていた。

広い空は自由を象徴するといつ。だが、その空の下にいたとしても自由だとは限らない。

ルークたちが騒ぐ声を漫然と聞きながら、無意識に自分の手の甲をさすった。

言じようの無い冷たいを感じて、ぎゅっと手を握る。これががある限り逃れられない。いや、無くなつたとしても……。

彼女は耳を塞ぐように顔を伏せた。

楽しげにルークに話しかけるアーニスや、少々情けない感じで話すミコウの声。

それに対して投げやりに答えるながらも、どこか楽しげなルーク。生き生きとした活気がとても羨ましい。妬ましい。

・・・私も普通の女の子だつたら…！

そんな慣れ親しんだ絶望をいつものように心の奥底に隠して、再び目をしっかりと見開いて自分の周りを観察し始めた。

自由に見てもいいと言った通り、特に厳重な警戒を受けることなく艦内を歩き回ることができた。要所要所に立つ兵士達は油断なく警備を行い、鍛度高さをつかがわせる。世界でも有数の最新鋭戦艦に最新の兵器。それに見合つだけの優秀な兵士達。何よりこのトップの曲者たを見れば、攻略の難しさを思い知らされた。

『ティア』

自分のおかげでいる立場の困難さに、軽くうんざりしていくと口の従者がすぐそばに立つのを感じた。

『どうかしら』

『一通りの脱出経路は確認した。逃げようと思えばたやすいだらう。だが・・』

『ルークを連れてとなると厳しいでしょうね』

『そうだな』

『だからと書いて、王族に連なるものを敵国の手に渡したままというわけにはいかないし・・・。面倒なことになつたわ』

『しかし、仮にも平和の象徴とまで言われている導師イオンが乗つているのだ。早々手荒な扱いはせんどう。彼らに預けて我々は本来の目的に戻つたほうがいいのではないかね?』

・・・・・・・

顔をこわばらせて黙り込んだ。

彼の言つていることは正しい。正しいのだ。
でも、できるならもう少しだけ・・・。

「ティア？」

ぬつと赤い髪が視界に映つた。

今にも暴れだしそうな顔をして、ティアを睨む。

「どーしたんだよ、変な顔して。

呼んでんだから返事しろよ」

「え？ あ、うん。」めん聞いてなかつたわ

「つたぐ、どーしたんだよ。なんかまた面白いもん見つけたのか？」

「いえ、そういうわけじゃないけど・・・」

ティアの足元には仔ライガがまとわりつき、時々一定の方向を警戒する様子で見ている。チーグルの仔もすこし不安げにして一人の間を右往左往していた。

『それで、どうするのだ？ マスター？』

姿は見えないままだが、きっと嫌みつたらしい表情をしてるだろうことは見なくてもわかる。反射的に罵つてやりたい気持ちが沸き起つたが、ぐっと抑えて唸るよう黙り込んだ。

『やれやれ先が思いやられるな』

それを横で聞いていたルークは口をひん曲げて手を引っ張った。

「せりとつとと行くわ」

振り向かず「ぐごぐ」と、ティアの手を掴んで船室に続くドアを指して歩く。

「おやおやー。仲がよろしくうだ」

「つぐー。強敵！・・・きやわーん！ ルーク様ーアースの手もひっぱってくださいー」

そんな彼らを見てジョイドは「やかに彼らの仲をからかい、アースはなにを思ったか対抗するように飛び掛ってきた。

それに驚いて仔ライガは走り回りミコウはあわてて周りをぐるぐると飛び回る。

『あやこめやいと騒ぐ彼らになぜか心が温かくなる気がした。』

船室に戻つて、ルークたちは黙つて紅茶を飲んでいた。

ティアは冷えたからだが少しずつまたまるのを感じながら、すぐそばで丸くなつた仔ライガを撫でていた。

先ほど兵士に頼んでいた、肉の蒸したものを持ちふく食べて今はクフクフと寝息を立てている。

「よしつ、決めた」

と、先ほどまで黙つて何かを考えていたルークがよつと身体を起して叫んだ。そして、近くで待機していた兵士に話しかける。

「おい」

「ジョイド大佐にお取次ぎいたしますか？」

「ああ、頼む」

「ルーク、決めたの？」

少々お待ちくださいと、部屋を去つていく兵士を見ながらティアはルークに声をかけてきた。

真剣なまなざしを向けられて、思わず皿を背けてぶつかりまつて答える。

「どうせこしたって、話聞かなきゃどうしようもない」

「話を聞いたら本格的に巻き込まれることになるわ、それでもいいの？」

「うるせーな。それにどうせ今までも軟禁されてたんだ。バチカルまで連れてつてくれるならどうでもいいや」

「どうでもこいつて……！ あなたそれ本気で言つてるのー？」

ルークは不満げな顔をして顔を背けた。

イオンは悪にやつじゃなし、あれほど嫌つてたマルクトのやつ

「でもそれほど嫌な感じもしない。（ジョンイドは除く）今まで何もできなかつた自分に、手を貸してほしいといわれたら悪い気はしない。平和のためにといわれたら特にだ。」

それでも、実際のところは彼女達の手を煩わせるのが嫌になつたのだ。

彼女らの振る舞いを見れば、断るといつたらしの艦全体を相手取つてでもルークの意思を尊重しかねない。彼女にそんなことをさせたくないなかつた。

ティアはきつい目でルークを睨みつけた。

自分の役目と彼とを秤にかけて引き裂かれそうな思いをしていたのに、そんな適当な考へで答えを出すなんて。こんななんならひとつとと見捨てればよかつた。何でこんななのために悩んでたんだう。

「信じらんない。ばっかじゃないの？」

「ばかっていひほうがばかなんだー！ ばかー！」

「ばかー、ばかばかー！」

「うるせーよばか！ じゃあ、聞かないって言つたうじつもりだつたんだよ！」

「それは・・・。『あらゆる手段を使ってでも脱出せせるわ、多少被害は出るでしょ』『けだ・』『』

「だから、それが嫌なんだつてー！」

「は？」

ルークは顔をほんのりと赤らめながらそんなことを口にした。

ティアはぽかんと口を開いて、そんな彼を見ていた。
はて、どういう意味だらう？ そんなに被害を出すのが嫌なのだ
らうか。

『ふん、彼はこれ以上ティアに迷惑をかけたくないといふことらし
いぞ。

それなら最初からもう少し気を使つてほしかつたものだが。
まあ、気持ちはわからんでもないな。
いかに世間知らずのお坊ちゃんといえども、私のマスターみたい
な美女をこきつかつてはいるのは気がとがめるだらう』

「え？」

「ば、ばか勘違いするなよ。

別にお前が心配だからとかそういうわけじゃ・・・

『やれやれ、いじっぱりもここまで来ると病氣だな』

アーチャーは呆れた様子で笑つた。

騒ぎに目を覚ました仔ライガは、眠たげな目で二人を見ていた。
のつそりと起き上がると、言い訳を探してオロオロしているルー
クの足元に近づいてきた。

そして、がぶりと足に噛み付いた。

大きな叫び声と慌てて走り去る音。

二人にしか聞こえない笑い声が船室に響いていた。

「いやー、お楽しみだつたようですねー」

「せんせん楽しくねーよ」

ジョイドのからかい交じりの言葉にルークは投げやりに答えた。なぜかティアはどこか心ここにあらずといった感じだ。

そんな二人を前にして、ジョイドはにこやかに一人を見渡した後表情を改めた。メガネを軽く直して思い口調で言葉を続ける。

「昨今、マルクト・キムラスカを挟んだ国境付近で、局地的な小競り合いが頻発しています。

恐らくは近いうちに大規模な戦争が始まるとしよう。

そこで、ピオニー陛下は平和条約締結を提案した親書を送ることにしたのです」

「僕は中立の立場から、使者として協力を要請されました

イオンも補足するように続けた。

「それはイオン様の意思ですか、それとも教団の?」

イオンの言葉にティアはなにを思つたのか量るような質問を投げかけた。

「こまかしは許さないといった厳しい目でイオンを見ている。

「間違いなく私の意志です」

「それで、ローレライ教団は・・・？」

誇るよつに答える彼に確認するよつに質問を重ねると、「それは・・・」と困つた様子で目をさまよわせた。

そのやり取りを興味深げに見ていたジエイドはかばうように口を開いた。

「嫌なところ突いてきますねー。確かに、教団の総意とは程遠いと言えます。

現在ローレライ教団は、イオン様を中心とする改革的な導師派と、大詠師モースを中心とする保守的大詠師派とで派閥抗争を繰り広げています」

「モースは戦争が起きたのを望んでいるんです。僕はマルクト軍の力を借りて、モースの軟禁から逃げ出しました」

イオンの話にティアは驚きの声を上げた。

「そんな、大詠師モースが戦争を？？

モース様は預言の成就だけを祈つておられるはず・・・」

「ティアさんは大詠師派なんですね。ショックですう・・・」

アニスの言葉にティアは顔を歪めた。

「私は中立よ。どちらかに加担するなんてありえない」

「おや、妙な言い回しですね。ありえない……ですか」

ジエイドの指摘にティアは微妙に困った顔をして顔を背けた。

「おい、俺を置いてけぼりにして勝手に話を進めるな！」

「ああ、済みません。あなたは世界のことを何も知らない『おぼつかない』でしたねえ」

完全に話についていけないルークが怒りの声を上げると、ジエイドは肩をすくめた。

「ああ？ なんだどう！？」

そんなルークをかまつことなく話は続く。

「教団の実情はともかくとして、僕らは親書をキムラスカへ運ばなければなりません」

イオンはとりなすみづて言つて、

「しかしながら、我々は敵国の兵士です。いくら和平の使者といつても、すんなりと国境を越えるのは難しい。ぐずぐずしていれば大詠師派の邪魔が入ります。その為に、あなたの力……いえ、地位が必要です」

ジエイドはそれに続けて説明を重ねた。

「おじおこ、おっさん。その言い方はねえだろ？ それに、人にものを頼むときは、頭下げるのが礼儀じゃねーの？」

「いいじゃない、わかりやすくて」

「あん？ ピー ゆー 意味だよ」

ティアのビニがポイントのずれた言葉にルークはきっと睨みつけた。

「そのままの意味ですかビニ？」

「馬鹿にしてんのか！？」

「いえ、そんなつもりは・・・」

「はいはい、痴話げんかは外でやつてくださいね」

「「違つ（こまち）……」」

「つたぐ、いつたいなんなんだよ。……で？」

ドカッと座りなおして、偉そつてふんぞり返つてジョイドを見た。

「やれやれ」

ジョイドは肩をすくめた。

そして片膝をつき、貴人にする動作でうやうやしく礼をする。周りで引き止める声が上がったが、動じずに講づ。

「どうか、お力をお貸しください。ルーク様」

「あんた、プライドねえなあ」

「生憎と、この程度のことに腹を立てるような安っぽいプライドは持ち合わせていいものですから」

ルークの無神経な言葉にも大して動じず、にこやかな笑みを浮かべた。

「分かつたよ。伯父上に取り成せばいいんだな」

「ありがとうございます。私は仕事があるので失礼しますが、ルーク様は『自由に』

「呼び捨てでいいよ。キモイな」

「分かりました。ルーク『様』」

嫌みつたらしく答えてジョイドは船室から出て行つた。

どこか悄然としているルークに「『主人様元気だすですのー』とミコウが飛びついた。

むきになつてミコウを叩き落したり、それをティアが止めようとしたりするさまをイオンは困った顔で見てた。

第十章 未熟な答え（後書き）

「」のティアさんはとってもシビアな設定です。
ホントにかなり。いろいろと。
設定が公開されるのは先の話になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1395y/>

深淵を引き裂く運命の剣

2011年11月26日16時54分発行